

一般国道
3号線 岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 2 集

山 田 沖 古 墳 群

福岡県遠賀郡岡垣町所在遺跡の調査

1 9 9 0

福岡県教育委員会

山田沖古墳群

福岡県遠賀郡岡垣町所在遺跡の調査

序

本書は、一般国道3号線岡垣バイパス建設に伴い、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて実施している埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

今回の報告書は、昭和61年度に調査した「山田沖古墳群」についての成果をまとめたものであります。

本書が、文化財への親しみと活用に広く利用され、さらに学術研究の発展に寄与できれば幸甚に思います。

なお、発掘調査にあたり、御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に深く感謝いたします。

平成2年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

1. 本書は、1980年度以来、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて、一般国道3号線岡垣バイパス建設に伴い破壊される埋蔵文化財の発掘調査を実施した遺跡の第2冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県遠賀郡岡垣町所在の「山田沖古墳群」で、同様にバイパス建設予定地内に所在した「野間窯跡群」については、1982年に第1冊目の報告書として刊行している。
3. 調査は、1986年度に、福岡県教育庁指導第二部文化課主任技師（現教育庁北九州教育事務所技術主査）馬田弘稔が担当した。
4. 調査後の整理は、文化課太宰府事務所で実施し、遺物の復原作業には、整理作業班員 森山シズ子があたり、遺物の実測作業には、土器の大半を整理補助員 福嶋育子、土器の一部とその他の遺物を馬田があたった。
また、遺物写真の撮影作業には、整理補助員 須原悦子があたり、遺構・遺物図面の整理は馬田、製図は整理補助員 豊福弥生・原カヨ子と馬田があたった。
5. 鉄製品の保存科学処理は、九州歴史資料館参事補佐 横田義章があたった。
6. 本書の編集・執筆は、馬田が担当した。

本文目次

序

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査組織	1
1. 調査に至るまで	1
2. 調査の経過	2
3. 調査の組織と関係者	3
第2節 遺跡の位置と環境	4

第2章 山田沖古墳群の調査

第1節 はじめに	8
第2節 1号墳の調査	8
1. 墳丘	8
2. 主本部と掘り方	8
3. 土層観察	11
4. 出土遺物	12
須恵器	13
土師器	20
鉄器	20
装身具	23
第3節 2号墳の調査	25
1. 墳丘と主本部	25
2. 土層観察	25
3. 墓道	25
4. 出土遺物	25
須恵器	25
鉄製品	26

第3章 おわりに

第1節 山田沖古墳群について	27
第2節 山田沖1号墳について	27
1. 仕上り規模と計画規模	27
2. 出土遺物	31

図版目次

- 図版 1 1. 山田沖古墳群北区（表土除去前）〔南東から〕
2. 同 （表土除去後）〔南東から〕
- 図版 2 1. 山田沖古墳群中央区西側の伐開作業〔南東から〕
2. 同 西側の表土除去作業〔南東から〕
- 図版 3 1. 山田沖古墳群中央区の無縁墓群（表土除去前）〔北から〕
2. 同 （表土除去後）〔北から〕
- 図版 4 1. 山田沖古墳群中央区東側の表土除去作業〔北から〕
2. 同 中央区 （表土除去後）〔北から〕
- 図版 5 1. 山田沖古墳群北・中央区全景〔西上空から〕
2. 山田沖古墳群1・2号墳全景〔西上空から〕
- 図版 6 1. 1・2号墳〔西低空から〕
2. 1号墳〔西から〕
- 図版 7 1. 山田沖古墳群の周辺地形〔南上空から〕
2. 1・2号墳〔南中空から〕
- 図版 8 1. 山田沖古墳群の周辺地形〔北上空から〕
2. 1号墳〔北中空から〕
- 図版 9 1. 1・2号墳〔東上空から〕
2. 1号墳全景〔北中空から〕
- 図版10 1. 1・2号墳〔西上空から〕
2. 1号墳〔東から〕
- 図版11 1. 1号墳〔西中空から〕
2. 同 奥壁と遺物出土状態〔西から〕
- 図版12 1. 1号墳石室の北壁部掘り方土層〔西から〕
2. 同 南壁部掘り方土層〔西から〕
3. 同 石室の掘り方〔西から〕
- 図版13 1. 1号墳玄門と遺物出土状態〔東から〕
2. 同 羨道と遺物出土状態〔西から〕
- 図版14 1. 1号墳墓道の土層断面〔東から〕
2. 同 墓道の遺物出土状態〔北から〕

図版15	1. 1号墳墓道の土層〔西から〕 2. 同 墓道の遺物出土状態〔南から〕
図版16	1号墳出土須恵器①
図版17	1号墳出土須恵器②
図版18	1号墳出土須恵器③・土師器
図版19	1号墳出土鉄鏃・刀子
図版20	1号墳出土玉・耳環 2号墳出土鉄器

挿 図 目 次

第1図	山田沖古墳群の位置と周辺主要遺跡（1/25,000）	5
第2図	山田沖古墳群周辺地形図（1/2,000）	6
第3図	1号墳実測図（1/60）	10~11間
第4図	1号墳出土須恵器実測図①（1/3）	14
第5図	1号墳出土須恵器実測図②（1/3）	16
第6図	1号墳出土須恵器実測図③（1/3）	18
第7図	1号墳出土土師器実測図（1/3）	20
第8図	1号墳出土鉄鏃・刀子実測図（1/2）	21
第9図	1号墳出土鉄刀（1/5）・装身具（1/2）実測図	23
第10図	2号墳出土須恵器（1/3）・鉄製品（1/2）実測図	26
第11図	1号墳計画規模方眼図（1/60）	32~33間

表 目 次

表1	1号墳掘り方規模一覧表	30
表2	1号墳主体部規模一覧表	31

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査組織

1. 調査に至るまで

『山田沖古墳群』は、福岡県遠賀郡岡垣町大字山田字沖に所在し、岡垣バイパス関係の埋蔵文化財発掘調査では、第2—B地点と呼称視しているものである。

当古墳群の調査の端緒は、1977年（昭和52年）9月に、建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所（以下、九地建と略）から、福岡県教育庁管理部（現指導第二部）に対し、『一般国道3号線岡垣バイパス』建設予定地内の文化財の有無についての分布調査の依頼にある。

文化庁では、これを受けて1977年10月に、九地建に対し、①発掘調査の必要がある地点、②埋蔵文化財の存在が予想されるが、試掘によってその有無を確認する必要がある地点、③樹木の繁茂が著しいため、伐採後に再度分布調査の必要がある地点として、計8地点を回答した。

九地建では、上記の回答を受けて、1977年11月に、文化課に対し、昭和55年（1980年）度工事着工予定地内に、第7・8地点が含まれるため早急に調査を実施してほしい旨の依頼をした。

文化課では、上記の依頼を受けて再度の分布調査をした結果、第9地点を新たに追加し、1980年5月6日～5月24日、第7～9地点の試掘調査を実施した。

試掘の結果、第7地点では窯数基の存在が確認されたため、同年7月28日～10月30日に本調査を実施し、第8地点では窯の付帯施設を考えられる炭を充填した土塚を検出し、1981年10月5日～10月20日に本調査を実施した。

なお、第9地点では何らの遺構も検出されていない。

以上の経過と試掘および本調査の成果については、「野間窯跡群」（『岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集、福岡県教育委員会、1982年）で既に報告している。

その後も、文化課では九地建と協議を重ね、1982年6月28日～7月3日に第4～6地点を、1986年12月8日～12月13日に第1—A・B地点と第3地点を試掘調査し、第1—B地点を除いて埋蔵文化財は所在しないとの結果を得、第1—B地点では、溝状遺構の一部を確認・調査した。

当古墳群の調査に至る経過は以上のとおりであるが、1988年12月には、第2—A地点の試掘調査を実施し、埋蔵文化財は所在しないとの結果を得ている。

2. 調査の経過

『山田沖古墳群』の調査は、1987年2月12日～3月31日まで実施した。

以下、調査日誌の抄録を記す。

- 2月12日 本日から、2-B地点の重機（ユンボ）での表土除去作業と伐採作業を開始する。
現地への重機の回走車での進入路が確保できないため、4地点～3地点～一丁溜池沿岸～農道を重機に自走させて2-B地点に到達する。
なお、調査地点の中央区南部（図版2-2）は小笹や雑木、東区（同4-2）は孟宗竹が繁茂したままであったので、発掘調査作業員とは別に、本日から伐開作業員を投入する。（同2-1）。
- 2月13日 中央区北部の現況は、標高32.5mを頂部とする中央区南部の北斜面を3m以上も地下げた蜜柑園となっていたが、念の為に2本の試掘溝を設けたが、整地土1m下は地山で、遺構は確認されず、蜜柑除去の際も同様であった（図版4-1）。
- 2月14日 東区北部の表土を除去するが、表土下は整地土が0.5～1mの厚さあり、整地土も除去したが遺構は確認されなかった（図版4-2）。
- 2月16～18日 西区は、バイパス用地買収時は調査区外西と共に同一の蜜柑園で、現況は、標高28m前後のキャベツ畑となっていたため、耕作土を除去する（図版1-1）。
耕作土は厚さ約0.4mあり、耕作土下は蜜柑園造成による地山削平面で、この削平面から蜜柑植生用の幅1.2mの東西方向の排水溝を、約4m間隔で4条検出した。
上記4条の排水溝の中で、1条のみが連続せず、この不連続部を中心に1m前後の石が径約4mの範囲の攪乱土内で多数検出され、破壊された古墳の石材かと思われた。このため、西区南部斜面の表土も除去する。
- 2月19日 中央区南部の現況は墓地で、九地建の用地担当者からは改葬済みと聞いていたが、伐開後に図版3-1に示すように、河原石が多く散見されたため、慎重に表土を除去した結果、多数の未改葬墓壇を検出した。
墓壇中央に小笹先端を立てた状態の写真が図版3-2で、東区南部も同様に未改葬墓多数を検出した。
なお、両墓地群内では、遺構は何ら確認されなかったため、未改葬墓への善処を九地建へ連絡し、本日で重機による表土除去作業を終了する。
- 3月9日 発掘器材を現地へ搬入し、テントを設営後、作業進入路を整備する。
- 3月10日 本日から、2-B地点の作業員による発掘調査を開始する。
2月16～18日で既述した攪乱土内の多数の石材を除去し、これら石材は、蜜柑園造成の際に、削平面より上部の石室材を盛土と共に、ブルドーザーで一気に押した

ために、落石したものであることを確認し、1号墳とする。

- 3月12日 1号墳石室内の落石をすべて除去し、床石を検出するが、床石検出時の土層観察で、造成による破壊以前に路線外の古墳同様に石室は盗掘され、床石も一部除去されていたことを確認する。北壁で鉄刀を、西壁で鉄鏝を検出する。
- 3月13日 1号墳石室の各壁の水洗作業と共に、周辺の遺構検出作業により、2号墳墓道を検出する。
- 3月14～24日 1・2号墳の発掘作業を続行するが、この間の雨天による作業中止日も多い。
- 3月25日 1号墳の墓道の遺物出土状態実測及び断面図作成。
- 3月27日 1号墳の遺物収納及び気球写真撮影の為の周辺部清掃作業。
- 3月28日 気球による写真撮影作業。
- 3月29～31日 1・2号墳を1/20で実測すると共に、周辺部を1/100で平板測量し、2-B地点の発掘調査を終了する。

3. 調査の組織と関係者

1986年度の1-A・B、2-B、3地点の調査と1988年度の2-A地点の調査、および1989年度の整理報告をするにあたっての組織と関係者は、下記のとおりである。

〔建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所〕

所長	北之園宏（前任）	高橋松男（前任）	森 久
副所長	中溝文之（前任）	竹中幸生（前任）	九谷秀明
建設専門官	甲斐栄二（前任）	古賀秀登（前任）	田中睦憲
工務課課長	武田 誠（前任）	衛藤恒利	
工務係長	安部雅俊（前任）	諏訪憲二	
設計係長	諏訪憲二（前任）	平川澄雄（前任）	西嶋正男
調査課課長	小田一哉（前任）	久良木裕（前任）	松崎安則
調査係長	犬束昌生（前任）	田中敏則	
建設監督官	高田孝一（前任）	平川輝義（前任）	入部秀信（前任）
	久保田次夫（前任）	佐々木武裕（前任）	
	桃坂繁 辛島秀治	古賀秀宜 中川博勝	田中常美

〔福岡県教育委員会〕

総括 教育長	友野 隆（前任）	竹井 宏（前任）	御手洗康
教育次長	竹井 宏（前任）	大鶴英雄（前任）	淵上雄幸
指導第二部部长	淵上雄幸（前任）	大平岩男（前任）	月森清三郎

指導第二部文化課課長 窪田康徳（前任） 葉石 勲（前任） 六本木聖久
文化課参事 森本精造
課長補佐 平 聖峰
課長技術補佐 宮小路賀宏
参事補佐 栗原和彦（現九州歴史資料館兼務）
柳田康雄 井上裕弘 石山勲

調査 指導第二部文化調査班総括（兼務） 柳田康雄（1—A・B, 3 地点試掘調査担当）
技術主査 副島邦弘（2—A 地点試掘調査担当）
主任技師 馬田弘稔（2—B 地点試掘調査担当・整理報告担当
現教育庁北九州教育事務所兼務技術主査）
技師 緒方 泉（現主任技師）

なお、2—B 地点「山田沖古墳群」の測量と実測に際し、九州歴史資料館主任技師 赤司善彦、九州大学学生 大西智和（現九州大学大学院生）・田中光（現北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室嘱託）、佐賀大学学生 野田徹の諸氏の援助を得た。

第2節 遺跡の位置と環境

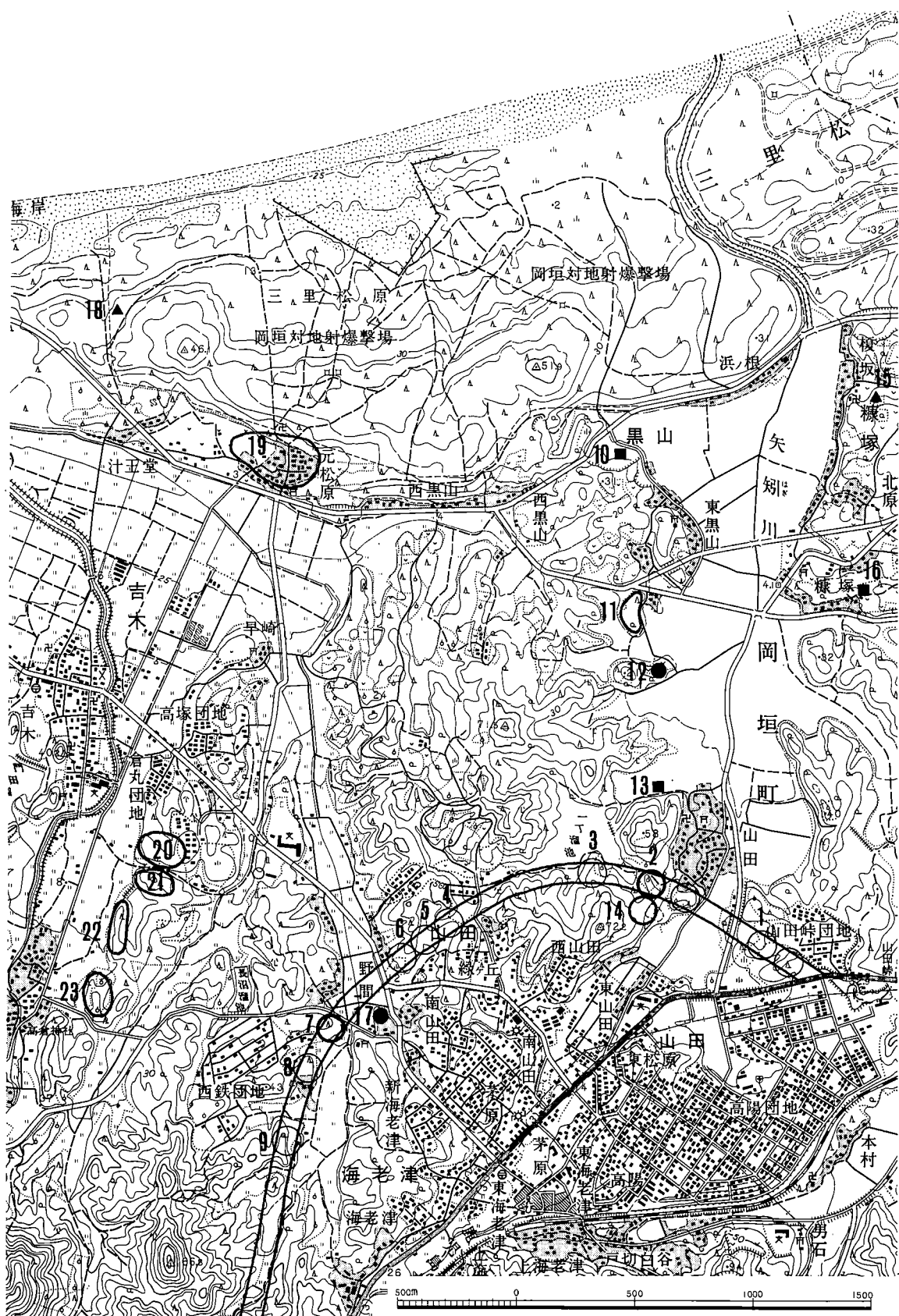
『山田沖古墳群』は、福岡県遠賀郡岡垣町大字山田字沖に所在し、調査した第2—B 地点は588, 589, 592—2・3 番地にあたり、この調査区内で、以下に報告する山田沖1・2号墳を検出し、調査区外に3・4号墳が現存していることを確認した。

しかし、当古墳群の所在地は、『福岡県遺跡等分布地図』では、遺跡番号390155～390158と図示され、1～4号墳（所在地 大字山田字楠木）と台帳記載された「楠木古墳群」の位置と一致する。

^(註1)
また、調査中には、第2図に示すように、字楠木は2—B 地点から250m 北方の標高58.0m の山を含む山麓部で、字沖の南に隣接する字飛熊の丘陵部にも古墳群の所在を確認した。

したがって、字楠木の山麓部での古墳群の所在の再確認による、前述の台帳記載の「楠木古墳群」が今後の分布調査で追認されることも充分予期されるので、本報告では、『山田沖古墳群』^(註2)として報告する。

なお、第1図のにも示すように、大字黒山字沖には、前述の『福岡県遺跡等分布地図』に図示・台帳記載された「沖古墳」が所在するため、本報告では『山田沖古墳群』としたものである。



第1図 山田沖古墳群の位置と周辺主要遺跡 (1/25,000)

- | | | | |
|------------|------------------|------------|---------------|
| 1. 1地点 | 2. 山田沖古墳群(2-B地点) | 3~6. 3~6地点 | 7. 野間寮跡群(7地点) |
| 8-9. 8-9地点 | 10. 黒山遺跡 | 11. 和田古墳群 | 12. 沖古墳 |
| 13. 大坪遺跡 | 14. 飛熊古墳群 | 15. 榎坂貝塚 | 16. 糖塚遺跡 |
| 17. 野間古墳 | 18. 汁五堂貝塚 | 19. 元松原遺跡 | 20. 菟坂古墳群 |
| 21. 繩手古墳群 | 22. 裏田古墳群 | 23. 東田古墳群 | |



第2図 山田沖古墳群周辺地形図 (1/2,000)

ところで、第1図に示すように、当古墳群は玄界灘に面した三里松原の砂丘からわずか4 km 南方の標高30m 弱の小丘陵上に位置する。

当古墳群周辺の遺跡については、既述の『第1集』で言及されており、第1図の図幅も同書に一致し、同書の図中14の楠木古墳群の名称のみを飛熊古墳群に変え、また、2の山田沖古墳群を追加図示したものである。

同書では、縄文時代後期の榎坂貝塚や、同時代前・中・後期だけでなく、弥生時代前期の短身の銅矛や中期と思われる銅矛・鉞の他に細形銅戈等を出土した元松原遺跡などが紹介されている。

また、同書の野間窯跡群は、3基が調査され、各窯跡の窯業年代は、1号窯跡は第IVA様式、2号窯跡は第IVA様式、3号窯跡は第ⅢB様式に開窯し、第IVA様式に閉窯したもので、1・2号窯跡は同時期生産と思われるものと報告されている。

(註3)

第2章 山田沖古墳群の調査

第1節 はじめに

前章の調査日誌抄でも述べたように、調査2—B地点内は、バイパス路線センター杭 No. 62以西（西区）が蜜柑園造成で1.5m 前後削平され、同 No. 59～62以北（北区）も同造成で3m 以上の地下げがなされ、北区以南（南区）と同 No. 58～59以北（東区）は近世～現代の墓地が多数営まれていた。

以上の各区のなかで、西区から1号墳の石室～墓道の残存部および2号墳の墓道の一部を検出した。

第2節 1号墳の調査

1. 墳丘

地山面に及ぶ造成時の削平により、墳丘は消滅し、墳丘基底部の地山整形の状態や周溝の有無など全く不明である。

しかし、第3章で後述することなどから、墳丘基底部径9.3m、周溝を設けている場合の周溝外縁径12.4m と考えられる。

また、造成による削平地山面から床石上面までが1.10m、同から玄室掘り方床面までが1.40m の深さを有することなどから、岡垣町に所在して、発掘調査で明かにされた6世紀後半の東田1号墳例（掘り方上面から同床面までの深さ2.10m）もあるように、ほぼ玄室天井石を除く石室のすべてを掘り方内に収め、墳頂部の盛土は1.5m 前後と考えられる。^{〔註4〕}

2. 主体部と掘り方（図版5～15、第3図）

本墳は、後述するように、仕上り主体部主軸をS—63°—W、計画主体部・計画掘り方主軸をS—66°—W にとり、南西方向に開口する単室の両袖型横穴式石室で、北西方向にのびる丘陵の尾根部に位置し、主軸は丘陵方向にほぼ直交する。

方形部の掘り方の規模は、奥壁側を北壁と呼び、仕上り玄室の中心を通る仕上り主軸とその中

心を通り直交する東西軸（以下、第2章では単に、中心・主軸・東西軸と略す）から測ると、東西軸下で主軸～東壁上端間2.30m・同下端間2.22m、主軸～西壁下段壁上端間1.94m・同下端間1.85mで、上端幅4.24m・下端幅4.07mとなり、深さは東壁で1.25mを測る。

また、主軸と平行に、南壁東端（羨道部掘り方西壁の北端）から北壁までを測ると、東西軸～南壁東端上端間2.86m・同～北壁上端間1.86mで、計4.66mとなり、同様に南壁西端（羨道部掘り方の北端）までを測ると、東西軸～南壁西端上幅間2.94m・同～北壁上端間1.69mで、計4.63mとなる。

掘り方のプランは、各壁隅いずれもシャープな稜をもち、各壁面の傾斜角も4～10°とほぼ直に近く、また、直線的に掘り込み、後述する玄室の各壁プラン方向とほぼ等しい。

以上のように、掘り方は整然と丁寧に設けられているが、西壁中央部が腰石外面形状に合わせて若干拡幅されており、石室全体を掘り方の西寄りに構えるなどの特徴が指摘できるが、このことについては、玄室プランの項で後述する。

床面は、東西軸断面図に示すように、東・西腰石部全体を15cm前後掘り下げ、雨水は両腰石と根石下を通り両壁端部へ、また、主軸断面図に示すように、玄門寄りがやや高く、雨水は羨道部と北壁端部へ、そして全体では羨道部へと排水できるように設けられており、別途に排水溝を設けない。

なお、主軸断面図に示すように、玄室北半部と羨道部以南の床面は、水盛りしたほどに水平である。

玄室の規模は、奥壁を北側壁とし、北側壁腰石2個の南石面の接線、東側壁腰石の西石面の接線、西側壁の北側壁寄りの大きい腰石の東石面の接線、南側壁（両袖石）腰石の北石面の接線の各交点や、既述の主軸および東西軸と各接線との交点を計測すると、以下のとおりである。

奥幅は主軸～東側壁間0.84m・同西側間0.82mの計1.66m、東西軸幅は主軸～東側壁間0.88m・同西側壁間0.90mの計1.78m、前幅は主軸～東側壁間0.93m・同西側壁間0.98mの計1.91mで、0.25mの前広がりである。

また、東側壁長は東西軸～北側壁間1.11m・同南側壁間1.12mの計2.23m、西側壁長は東西軸～北壁間1.32m・同南壁間1.34mの計2.66m、主軸下での北壁～南壁間は東西軸～北壁間1.21m・同南壁間1.22mの計2.43mで、0.43mの西広がりである。

なお、東側壁の腰石は、長さ2.89m・高さ、1.14m・厚さ0.73mの巨石1個を配し、西側壁の腰石にも長さ2m以上の巨石を奥壁寄りに配すが、北側壁の腰石には大きさ1m内外で厚さも0.30m前後の小ぶりの2個を配している。

以上の腰石村の各壁配置は、玄室プランと掘り方プランの両者に大きく影響し、その配置工程などの一端を①以下のように示すものか。

①玄室～羨道～墓道の掘り方を、主体部主軸の計画方向（第3章で後述）に従い、計画主軸

に平行あるいは直交方向に設けたが、その計画主軸は掘り方の方形部東壁や羨道～墓道方向の計測値であるS—66°—W（同後述）であった。

②玄室の腰石は、当初に、最大の巨石である東側壁石の西（内）側石面をほぼ計画主軸に一致させて、現状のように配した。

③次に、2番目の巨石である西側壁石を計画主軸に従って配そうと試みた。

④しかし、この西側壁腰石材の形状は、南半部西（外）側石面が大きく張り出し、また、全体の断面形状が、断面図にも示すように上面幅よりも下面幅が小さく不安定な状態であるが、この状態で据え置くため（内側石面を平坦面とすることを意図し、2段目に積む壁材の安定のため奥行の深い上面を得ることを意図するため）に、掘り方西壁中央の上部を拡幅し、配石作業を容易に、また、根石で腰石を安定させた。

なお、この工程までの掘り方北壁プランは、同壁東半部に遺存する下段壁が示すように、計画主軸に整然と直交しており、この当初の直交北壁と東・西側壁腰石の両北側石面間は等しくなるように配した。

⑤西側壁の玄門寄りの小ぶりの腰石を、計画主軸に従って、また、計画東西幅に従って配す。

⑥北壁腰石2個を、2個の主軸側石面の凹凸がほぼ整接した状態で、また、東・西側壁側石面が東・西側壁腰石の内側石面に内接するよう計画主軸と直交方向に従って配そうと試みた。

⑦しかし、計画主軸と直交方向に配しては、2石が両側壁間に収まらないので、既述④の掘り方北壁中央部全体の上位を、現状の上段壁のように拡幅したため、計画規模よりも若干大きい仕上りとなった。

⑧最後に、後述する南側壁を配すが、当初に東側玄門石を配し、次に、計画した玄門幅を確保しつつ西側玄門腰石をも配そうと試みた。

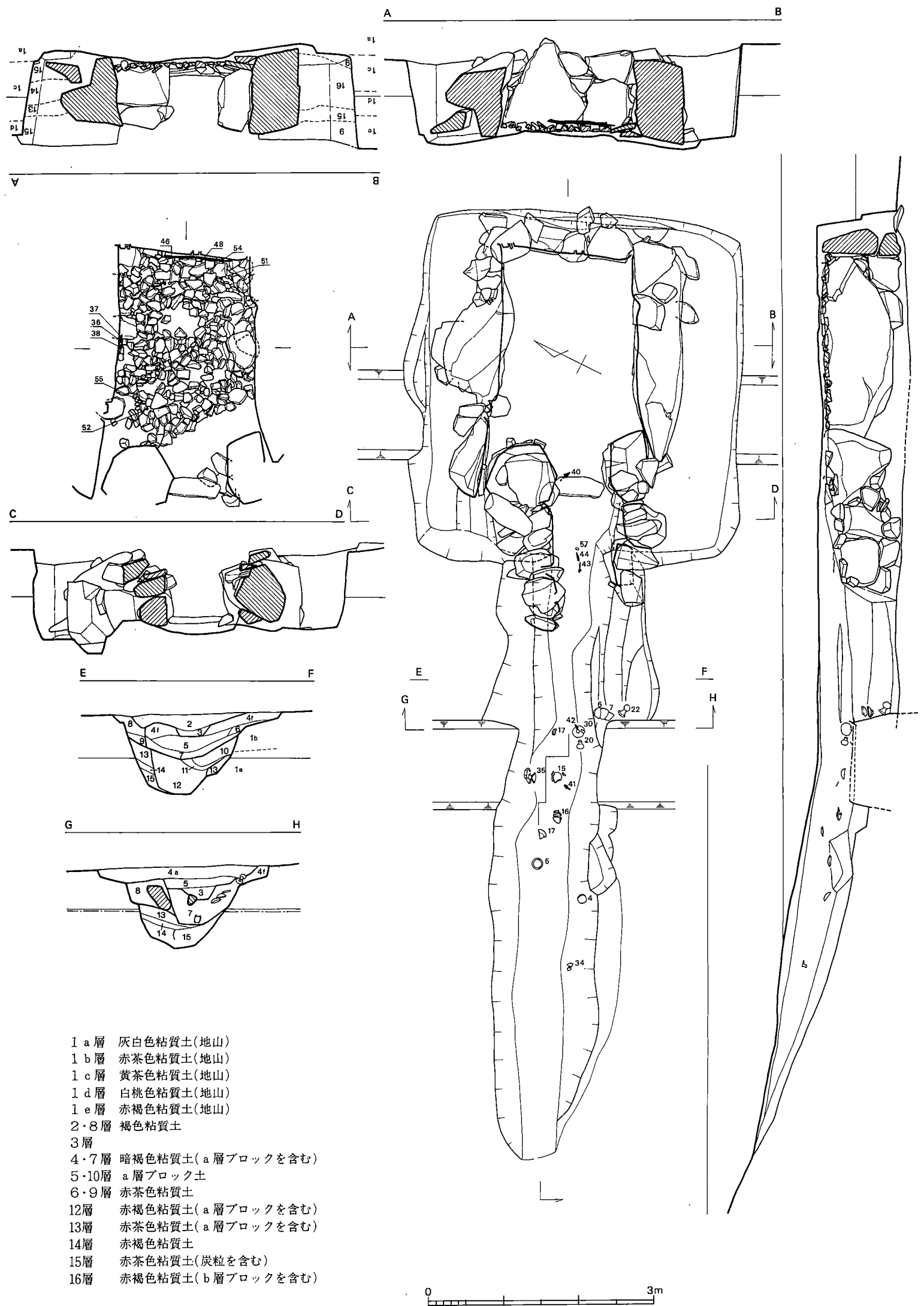
⑨しかし、西側玄門腰石材は、東側のそれよりひとまわり大きく、意図する玄門幅よりも狭くなるため、前述⑤で既述した小さめの西側壁腰石を、現状のように西外方に移動・再配置したため、玄室前幅が同奥幅よりも既述のとおり0.25m前広がりに変化した。

玄室内の床石は、若干の割石や扁平気味の転石を使用し、大略的には20cm前後の石材が下層・10cm前後の石材が上層に認められ、玉砂利的な小石は皆無に近い。

室内の中央部や玄門部の床石は、盗掘に際し除去され、また、遺存部での攪乱も認められるが、追葬時に上層の10cm前後の石材が加えられたものかも知れない。

また、小石は床上面の攪乱土中からもほとんど出土していないので、別途に敷きつめたのではないものか。

玄門部の規模は、東玄門腰石では北・西石面屈折稜、西玄門腰石では北・東石面屈折稜を測点とすると、主軸～東玄門石間0.55m・同西玄門石間0.38mで、計0.93mとなり、第3章で後述する両屈折稜間を直接計測しても0.93mとなる。



- 1 a 層 灰白色粘質土(地山)
- 1 b 層 赤茶色粘質土(地山)
- 1 c 層 黄茶色粘質土(地山)
- 1 d 層 白桃色粘質土(地山)
- 1 e 層 赤褐色粘質土(地山)
- 2・8 層 褐色粘質土
- 3 層
- 4・7 層 暗褐色粘質土(a層ブロックを含む)
- 5・10 層 a層ブロック土
- 6・9 層 赤茶色粘質土
- 12 層 赤褐色粘質土(a層ブロックを含む)
- 13 層 赤茶色粘質土(a層ブロックを含む)
- 14 層 赤褐色粘質土
- 15 層 赤茶色粘質土(炭粒を含む)
- 16 層 赤褐色粘質土(b層ブロックを含む)

第3図 1号墳実測図 (1/60)

玄門のプランは、東・西玄門腰石と羨道部北端の東・西腰石との各接点を結ぶ接線と、上記の両屈折稜間を結ぶ線も第3章で後述するように平行し、両線間の玄門長は0.765mを計測する。

なお、框石前面の床石や、閉塞施設は盗掘により除去されている。

羨道部の規模は、玄門寄りの西側壁腰石は主軸と平行し、主軸～同腰石間0.22mを測り、主軸～西玄門腰石の西石面間とあまり変わらないが、玄門寄りの東側壁腰石は、主軸～東玄門腰石の東石面間よりも15cm前後幅広となっている。

しかし、この幅広化は、断面図に示すように、東側腰石上面に2・3段の側壁石を安定して積み上げるために、腰石下に大きめの根石を挿入し、腰石を掘り方東壁に外傾させたからに他ならず、意図した東・西側壁腰石間は、第3章で後述する $0.31\text{m} \times 2.5 = 0.775\text{m}$ である。

羨道のプランは、東・西側壁共に、方形部掘り方内に玄門腰石に接して両腰石を外傾して配し、腰石上段の壁材も同様に外傾して積み上げることから、天井石は当初から構架させない造りと考えられる。

なお、玄門石寄りの東・西腰石より南側の掘り方には、東側では掘り方壁を掘り込んで腰石材よりやや小ぶりの羨道部貼石がプランで1個、西側では掘り方壁を若干拡張しての羨道部貼石が3個配されている。

墓道は、主軸方向にほぼ一致し、羨道部の西側貼石南端から測れば7.97m、東西軸から測れば10.69mまでが遺存し、その南端は里道掘削によって消滅している。

3. 土層観察 (図版12・14・15, 第3図)

前節で説明したように、西区は地山面に及ぶ削平をうけているが、東区などの旧地形に近い区や調査区外の雑木山の尾根部の土層は、図版3—2に示すように、10～20cm前後の表土下には暗褐色土などの旧表土や堆積土はなく、そのまま20cm前後の褐色粘質土地山となる。

上記の褐色粘質土地山(漸移層)は、流失して認められない所もあり、この層の下では、粘質土系の第三紀層特有の、急傾斜し、あるいはほぼ平坦な、そしてわずかに離れば全く色の異なる粘質土層となる。

第3図の玄室と墓道の東西断面図に示すように、地山の1a～1e層もすべて粘質土である。

玄室の東西断面図は、掘り方見透し図に、破線で掘り方の裏込め土層を示したものであるが、側壁腰石を根石5～6個で安定させた後は、掘り方壁との間隙には別途に裏込め石を使用することなく、9・13～16層の地山掘削土のみで順次埋めている。

埋土が、既述のように粘質土であるため、版築様に固めることもなく、16層例では厚さ0.7mを測るように、若干踏み固める程度で一気に裏込めしたものであろう。

墓道断面図は、蜜柑園造成時の排水溝掘削埋土中の攪乱遺物の収納を兼ねて、G—H断面で作成し、また、その土層堤の北壁のE—F断面でも作成した。

墓道の土層群は、巨視的には①～⑤の5群に分けられる。

E—F断面では、①2・3層、②4f～7層、③8～11層、④12層、⑤13～15層で、G—H断面では、①4a・5・3層、②4f・7層、③8層、⑤13～15層である。

①群は、両断面共に3層の黒褐色土が最下層で連続し、蜜柑園造成以前の盗掘による開口以降の堆積層と思われる、②群以下の土層に比べて軟質である。

②群は、両断面共に③群を切り、G—H断面図中に見透し図で示すように、4f層から完形の甕形土器（第4図22）・7層から完形に近い杯身・杯蓋（同7・6）などが出土した。

以上のことなどから、②群は3次追葬以降の流入堆積土で、上記の出土土器は、東側の4f層下面の平坦部に配された墓道供献土器が転倒・転入したものと思われる、このことについては第3章第2節2で後述する。

③群は、E—F断面では④・⑤群を、G—H断面では⑤群を切ることなどから、同様に2次追葬以降の流入堆積土で、11層の黒褐色土の堆積状態から、墳丘上には既に造営以降、腐植土が流入・堆積するだけの若干の植生はあったものか。

④群も、同様に2次追葬時の再掘坑内の自然堆積土と思われる、12層の赤褐色粘質土は地山1e層に1a層ブロック土が混在し、玄室の東西側壁断面の腰石裏込埋土と同様の地山掘削土で、土層も厚い。

以上のことなどから、墳丘上には腐植土が流入・堆積するだけの植生はなく、また、盛土の自然養生が充分できていない造営以降短期内の追葬であったものか。

⑤群は、①群に切られる。先述の玄室東西断面の腰石裏込埋土の土層群と似てはいるが、第3章第2節2で後述するように、1次追葬時の埋土であると考えられる。

なお、⑤群のG—H断面で既述した4f層下面の平坦部と、E—F断面の8層部での地山面平坦部（G—H断面では⑤群4a層地山部での平坦部）について、第3章第2節2で後述する。

4. 出土遺物

玄室～羨道部の盗掘は著しく、玄室からの土器類はなく、耳環なども羨道部の盗掘攪乱土から出土し、土器類の多くは墓道部を横断する蜜柑園造成時の排水溝埋土中から出土した。

しかし、墓道からは、既述のような墓道肩の平坦部供献の一括土器群が検出され、奥壁に接して原位置のまま鉄刀が、西側壁に接して鉄鏃が検出された。

なお、第3図の遺物出土状態の番号と、図版16～20および第4～9図の遺物番号は一致する。須恵器（図版16～18、第4～6図）

第3図に出土状態を示していない須恵器の出土位置は、土層観察の項で既述した墓道断面土堤中の土層㊸群7層から8・21と土堤以南の㊸群から31が出土し、土堤中の土層㊸群12層から11・12と土堤以南の㊸群から29が出土した。

また、土層㊸群から1・3・10・24・25・27・28・33が出土し、墓道G—H断面南側の蜜柑園造成時の排水溝のなかでも、墓道部に相当する埋めもどし部の土中から、2・9・13・14・18・19・26・32が収納されたもので、23は排水溝のなかでも墓道部外の埋めもどし部の土中から収納されたものである。

杯蓋（1～4・6・11～13・15・16）

蓋は、古い特徴を残すa類（1・6）と新しい特徴を示すc類（13・15・16）とその過渡的なb類（2～4・11・12）の三者がある。

a類は6が好例で、口径12.9cm・器高4.2cmを測り、体部器周の $\frac{1}{8}$ を欠失する。

器外は、ⅢA式で体部と天井部との境に認められる沈線はないが、直線的に高く外傾する体部と天井部との屈折稜による境を明瞭に残し、口唇端部はシャープである。

器内は、口唇部内面に明瞭な段はないが、わずかな沈部が認められ、口唇部と体部との境はシャープな稜で屈折し、直線的な体部から大きく屈曲して天井部に移行するⅢA式の特徴を残す。

なお、天井部の器外は屈折稜近くまで回転ヘラ削りし、器内は不定方向のナデを加える。

胎土に2mm大の砂も含み、焼成は普通で、色調は器内・肉が青灰色、器外が暗青灰色を呈し、器外は自然灰釉と器壁の剥離が著しい。

b類は4が好例で、口径12.8cm・器高3.9cmを測り、口縁部をわずかに欠失する。

器外は、やや内弯気味に短く立ち上がる体部やシャープな口唇端部にⅢA式の特徴を残しつつも、全体的には体部から内弯しながら天井部へ移行するⅢB式の特徴も示す。

器内は、体部から口唇部への屈折稜や口唇部内面のわずかな沈部にⅢA式の特徴を残しつつも、体部から天井部へ内弯しつつ移行するⅢB式の特徴も示す。

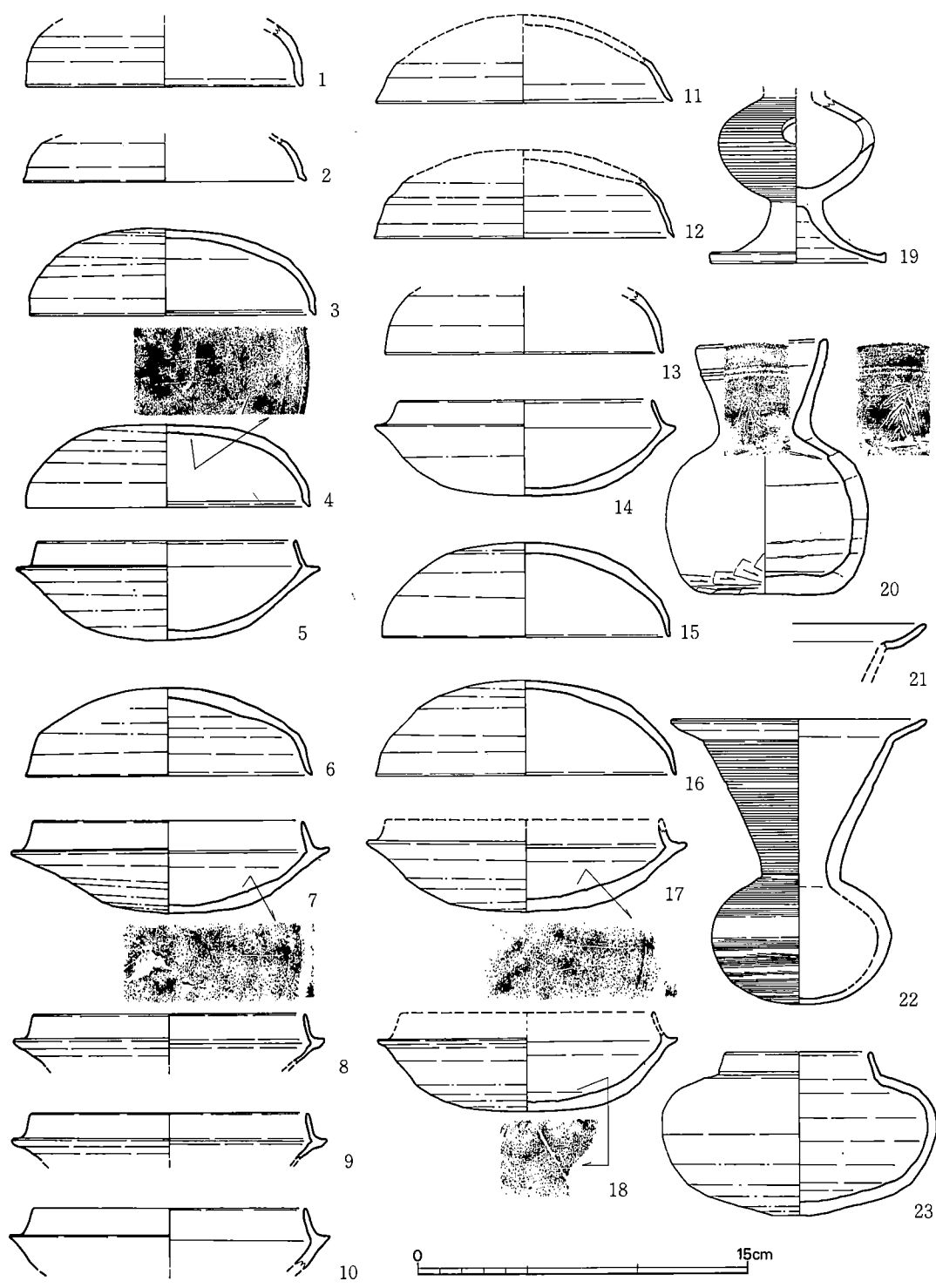
胎土に1mm大の砂も含み、焼成は普通で、器内が青灰色、器外が暗青灰～赤味灰色を呈し、器外の口縁～器内の口唇部の一部にかけて自然灰釉を認める。

なお、天井部の器外は中位まで回転ヘラ削りを施し、器内は丁寧な不定方向ナデを加え、＝状の浅いヘラ記号を施す。

3は、口径12.7～13.5cmと歪みが著しく、器高4.0cmを測り、4同様の整形・技法であるが器内全面に淡緑黄味灰色の薄い自然灰釉を認め、口縁部器周の $\frac{1}{4}$ を欠失する。

c類は15が好例で、口径12.9cm・器高4.4cmを測り、完形である。

器外は、体部と天井部の境が明瞭でなく、ほぼ体部からそのまま内弯しつつ天井部に移行するⅢB式の特徴を示す。



第4图 1号墳出土須恵器実測图① (1/3)

器内は、天井部と体部は屈曲せずにそのまま内弯し、体部と沈部を有さない口唇面に屈折稜はなく、口唇端部も丸いなどⅢB式の特徴を示す。

胎土に1mm大の砂を多く含み、焼成は普通で、色調は器内が青灰色、器外が青灰～暗青灰色を呈す。

なお、天井部の器外は上位のみ回転ヘラ削りを施し、器内は丁寧な不定方向ナデを加える。

杯身（5・7～10・14・17・18）

身は、蓋の分類に従えば、新しい特徴を示すc類（14）とその新しい特徴への過渡的なb類（5・7～10・17・18）の二者がある。

b類は5・7・17が好例である。

5は、口径11.6cm・受け部外径13.8cm・器高4.6cmを測る完形である。

7は、口径12.2cm・受け部外径14.4cm・器高4.4cmを測り、器周の $\frac{1}{8}$ 強を欠失する。

17は、口径約12.4cm・受け部外径約14.5cm・器高約4.3cmを測り、口縁部器周の $\frac{3}{8}$ を欠失する。

5・7・17共に、器外体部の回転ヘラ削りは中位まで施し、5では、平坦面を有す受け部と直線的に内傾する口縁部はシャープに屈折し、7では、直線的でわずかにしか内傾しない口縁部が高く立ち上がり、17でもわずかな内傾度の口縁部であるなどⅢA式の特徴を残す。

上記に加えて、5では7・17およびc類に比べて器高が若干高く、杯部が深いのもⅢA式の特徴を残している。

しかし、5・7・17共に口唇端部が既に丸味を呈し、5では立ち上がり部がc類の14同様にやや大きく内傾し、7・17では受け部上面から稜を有さずに内弯しつつ口縁部へと移行するなどⅢB式の特徴も示す。

c類の14は、口径11.5cm・受け部外径13.6cm・器高4.5cmを測り、完形である。

器外は、体部やや上位までを回転ヘラ削りし、受け部上面は内弯してそのまま強く内傾する立ち上がりの低い口縁部へと移行し、受け部下面から体部へもほぼ変化なく内弯するなどⅢB式の特徴を示し、口縁端部も丸く、端部内面の沈部や端部と立ち上がり部との器内のシャープな屈折稜などもなく、ⅢB式の特徴を残さない。

焼成は普通で、細砂を多く含み、色調は器内・外共に青灰色で、器外の受け部下面以下の全体に淡緑味灰色の薄い自然灰釉を認める。

高杯（24～27）

24・26は無蓋の高杯で、24は器周残 $\frac{1}{2}$ 弱の破片で、復原口径11.6cmを測り、器外はカキ目を加えた体部と口縁部との境に段を有し、口縁部は下位でわずかに外傾しつつ大きく外傾する。

26は、体部以下がほぼ完形で、器高約15cm・脚裾径10.9cmを測り、器外は脚部にカキ目を加え、杯部はハの字状に開く脚部との接合部のヨコナデを除き、体部下面から口縁部との境

まで丁寧な回転ヘラ削りのままで、器内は体部全面に丁寧に不整方向ナデを加える。

25は、カキ目を加えた脚部中位よりやや上に2条の凹線を認める。

なお、28は有蓋高杯の蓋で、口縁部器周の $\frac{1}{4}$ を欠失し、口径約12.8cmを測り、器内は天井部に丁寧な不定方向ナデを加え、口縁端部は丸い。

瓿形土器 (22)

口径11.5cm・器高14.0cmを測り、完形であるがやや扁平気味の体部に、通有認めるものである円孔が無い。器外は、口縁部下面と体部最大径部を除き、体部の下面中央からハの字状に開口する頸部にかけて丁寧なカキ目を加え、頸部上位に1条の凹線を認める。器外の口縁部下面から器内の頸部下位までのヨコナデも丁寧である。

胎土に砂粒をやや少なく含み、焼成はやや不良で、器内・外が共に暗赤紫灰色、器肉が赤味灰色を呈す。

瓿 (21)

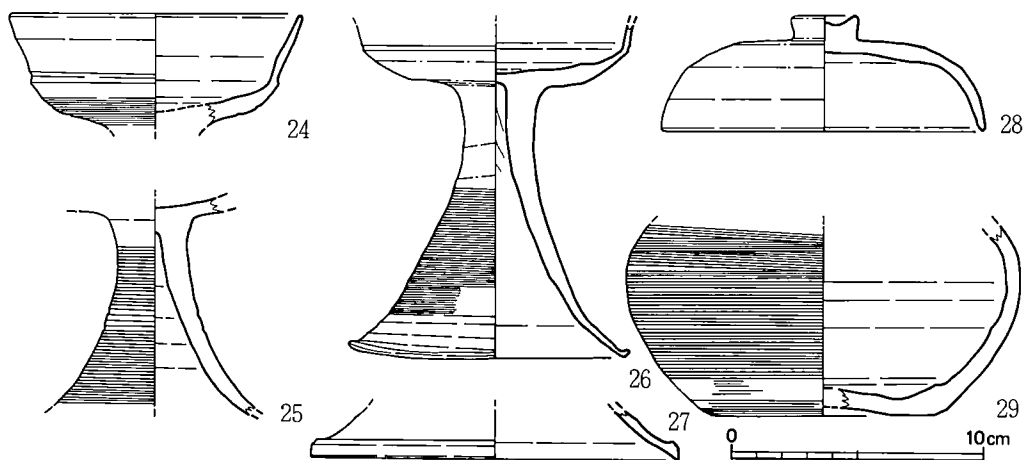
口縁部の小破片である。

脚付瓿 (19)

口頸部を欠失し、脚裾の一部も欠くが、体部最大径7.1cm・脚裾径8.0cm・現存器高7.4cmを測る。カキ目を加えた扁平な体部内に、穿孔の際に転入した円形体部片がそのまま遺存する。

横瓶 (33)

口頸部や胴部の大半を欠失するが、胴部長径約32cm・同短径約25cmで、器高は30cm前後を測る。



第5図 1号墳出土須恵器実測図② (1/3)

長頸小壺 (20)

口径6.0cm・胴部最大径9.2cm・器高11.5cmを測り、完形である。

この土器については、本報告にあたっての整理作業の段階で、橋口達也氏の『似非土師須恵器』の論文で「^{はじめどき}擬土師須恵器——形態は土師器に似せてつくるが、土師器とも通常の須恵器とも異なる形態をもつものが多く、胎土および成形・調整手法は須恵器的で、須恵器工人によって作られ、登り窯またはその周辺で焼成されたもの。したがって硬質赤焼、硬質灰陶の両者がある」の例として紹介の機会を得たものである。

成形技法を器内・肉で観察すると、底部を円板状に指押えし、断面部で底部から測れば3.3cmの高さまでの胴部を粘土紐を押えつけながら巻き上げており、その接合痕は、断面部で3段を数え、胴下半部の外傾したままの第1工程を終え、3段目の上面は平坦な擬口縁状を呈す。

つぎに、4.9cmの高さまで4段目の粘土帯を加え、底部との屈折部から4.5cmの高さまでを指先によるヨコナデをやや丁寧に施すが接合痕を各所に残し、4段目の上面にもナデを加えて擬口縁を作り、胴最大径部の内傾した第2工程を終える。

つぎに、6.1cmの高さまで5段目の粘土帯を加え、4～5段目間に指先によるヨコナデを雑に施し、5段目の上面にも指押え後に横方向のナデを加え、胴上半部の内彎したままの第3工程を終え、5段目の上面の高さは6.1～6.8cmまでを測るように不揃いのままである。

つぎに、頸肩部に6段目の粘土帯を積み上げ指先で肩部は指先で軽く押さえたのみとし、頸部を丁寧に成形し、第4工程を終了する。

最後に、頸部～口縁部を粘土紐を巻き上げ、ヨコナデを丁寧に施し、第5工程を終了するが、わずかに斜方向の巻き上げ接合痕を残す。

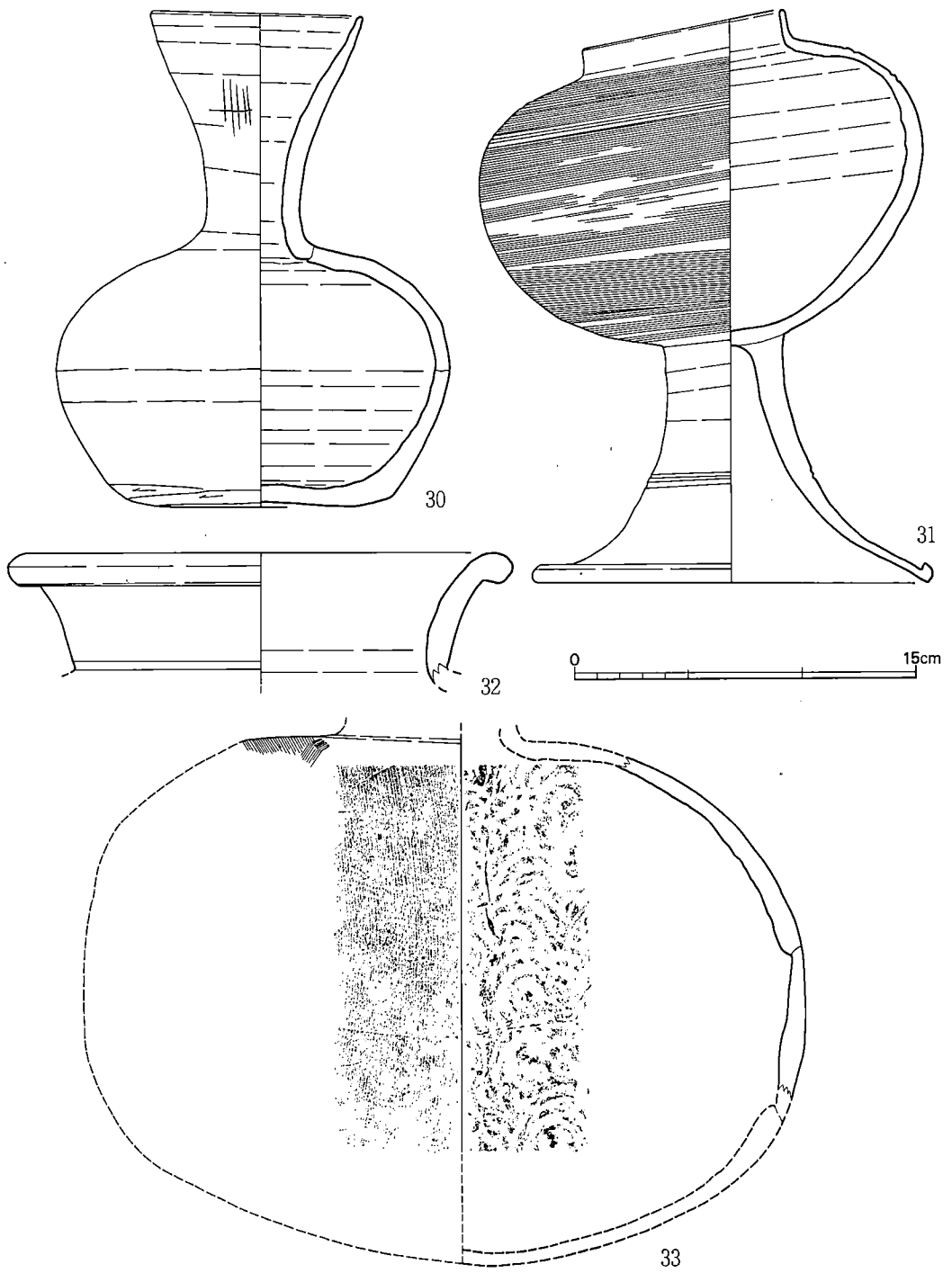
器外は、胴部を横方向にナデ、頸肩部～口縁部をヨコナデし、その後で、底部から胴部の下位を手持ちヘラ削りして、整形する。

頸部には、相対峙する位置に、やや斜方向の有軸羽状文を、図上では正面に浅く、裏面に深く、共にシャープにヘラ描きする。

なお、橋口氏の紹介では、「口縁部には1ヶ所押えて片口的につくられた部分がある。」と説明されたのは、口縁端部器周での幅1.5cm間が周辺端部上面から深さ2mmだけ窪み、器壁内面へ窪みの縁が2mmだけ盛り上がる部分のことである。

このことについては、前述した有軸羽状文を施す際のヘラの切り込み断面形とやや弧状を呈する切り込み線の動きの観察と実際に土器を手にしてのヘラ描き動作の追体験からすれば、右の手の平を胴部下半・同親指を胴部上半・人差指の指先を口唇端部に配し、左の手で持ったヘラにて、強く描くとき、先述の裏面部の深くてシャープな有軸羽状文が施文でき、口唇端部に上記の窪みが、人差指の指先による圧痕として単に生じる。

上述のことから、「片口的につくられた」のではなく、後述の長頸壺30の器種・器形を、非



第6图 1号墳出土須恵器実測図③ (1/3)

日常的な小形祭祀用土器として当初から意識して有軸羽状文を施文し、製作したもので、また、入手・使用者もそのことを当初から意識して入手し、既述した出土位置・状態からも明かなように祭祀用に使用し、墓道肩部の平坦面に配したものである。

なお、通常の竅に認められる体部の円孔が施されていない竅形土器(22)も、無円孔という特徴とこの小形長頸壺との近接した出土状態から、同様に、通常の竅以上に、非日常的な祭祀用土器として当初から意識して穿孔せずに製作され、また、入手・使用されたものであり、単に穿孔忘れの竅ではない。

以上のことから、橋口氏によって「擬土師須恵器」として紹介の機会を得たこの土器は、氏の「擬土師須恵器」の概念規定についての是非はともかく、この小形長頸壺に関しては、形態は須恵器の長頸壺に似せて「通常の須恵器とも異なる形態」(祭祀用小形土器)として、「胎土および成形・調整手法は須恵器的で」、加えて、土師器的で、「登り窯」「で焼成されたもの」で、「硬質」の須恵器と言えよう。

なお、竅形土器22は、形態は須恵器の竅に似せてつくるが、氏の指摘のように「通常の須恵器とも異なる形態をもつ」もの(祭祀用竅形土器)で、「胎土および成形・調整技法は須恵器的で、須恵器工人によって作られ、登り窯」「の周辺で焼成されたもの」の特徴とは一致し、「したがって硬質赤焼き」の特徴に若干似て焼成がやや不良となったものであろう。

壺(32)

口径22.2cmを測り、器周残 $\frac{1}{4}$ の破片で、器内・外共に緑黄味灰色の自然灰釉を認める。

胎土に5mm大の砂も含み、破片部での焼成は良好で、色調は器内・肉が灰色、器外が暗青灰色を呈す。

有蓋短頸壺(23)

器形の $\frac{1}{2}$ 弱を欠失し、口径6.6cm・胴部最大径12.4cm・器高7.4cmを測る。

器外は、胴部最大径よりやや下までを回転ヘラ削りし、器内は底部に指先による押えを加える。

なお、器外の肩部には、蓋をセットした焼成痕が明瞭に残り、蓋の口径は約8.8cmと測ることができる。

脚付有蓋短頸壺(31)

口径9.1cm・胴部最大径19.0cm・脚裾径17.5cm・器高23.3~25.0cmを測り、器周残は口縁~胴上半部が $\frac{1}{2}$ 弱で、脚裾の一部を欠失する。

器外は脚下半部に2条の凹線、胴上半部にカキ目後に2条の凹線を2ヶ所にそれぞれ加える。

長頸壺(30)

口径約8.0cm・胴部最大径17.0cm・底部9.5cm・器高21.6cmを測り、頸部上半~口縁部の $\frac{1}{2}$ 弱を欠失し、胴部も一部欠失する。

器外は、底部から胴部最下位までを、丁寧に定方向の手持ちへら削りし、上げ底気味に安定させ、胴部の上・下半部の接合部から肩部までにカキ目を施す。

また、頸部上位にへら記号様のものを認めるが、所謂、へら記号ではなく、小形長頸壺20で既述したように、20の頸部への祭祀用土器としての非日常的な「有軸羽状文」の意識的な施文と同様に、意識的に「有軸羽状文」を簡略化して施文したもので、横方向の1線が20での縦方向の軸部、縦方向の5線が20での左・右5本の羽状文部に対応すると言えるものか。

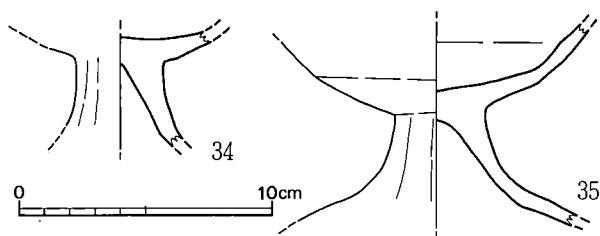
以上のことに加えて、即述のように20や罍形土器22と同様の出土状態であることなどから、この3例は、製作～入手～使用～墓道肩部平担面への配置に至るまで、セット関係が継続され、その使用者こそ、当古墳を造営した当初の被葬者と考えるべきか。

胎土に4mm大の砂も含み、焼成は良く、色調は器肉が青灰色、器外～器内口頸部が暗青灰色を呈し、器外の胴部最下位～口縁部の一部にかけて、淡緑黄味灰色の薄い自然灰釉を認める。

土師器（図版18，第7図）

高杯（34・35）

第3図に出土状態を示すように、35は墓道G—H断面南側の蜜柑園造成時の排水溝床面よりから更に10cm下の、墓道に伴う埋土中から検出したもので、杯蓋15や長頸壺30とほとんど同一レベルでの出土である。



第7図 1号墳出土土師器実測図（1/3）

34も、第3図に示すように、墓道南端部で床面から30cm弱の高さから出土した。

35は、図示部の器周はほぼ遺存するが、口縁部と脚裾部のすべての器周を欠失し、器高は10cm前後を測るものと思われる。

器内・外共に、器表の風化・剥離が著しいが、器外は脚柱部にへら削りを施し、内穹気味の杯底部から大きく外傾する体部との境に稜を認める。

精製された胎土に細砂を含み、焼成はやや悪く、色調は器内・外・肉共に明茶褐色を呈す。

34も、ほぼ35同様の脚柱部片である。

鉄器（図版19・20，第8・9図）

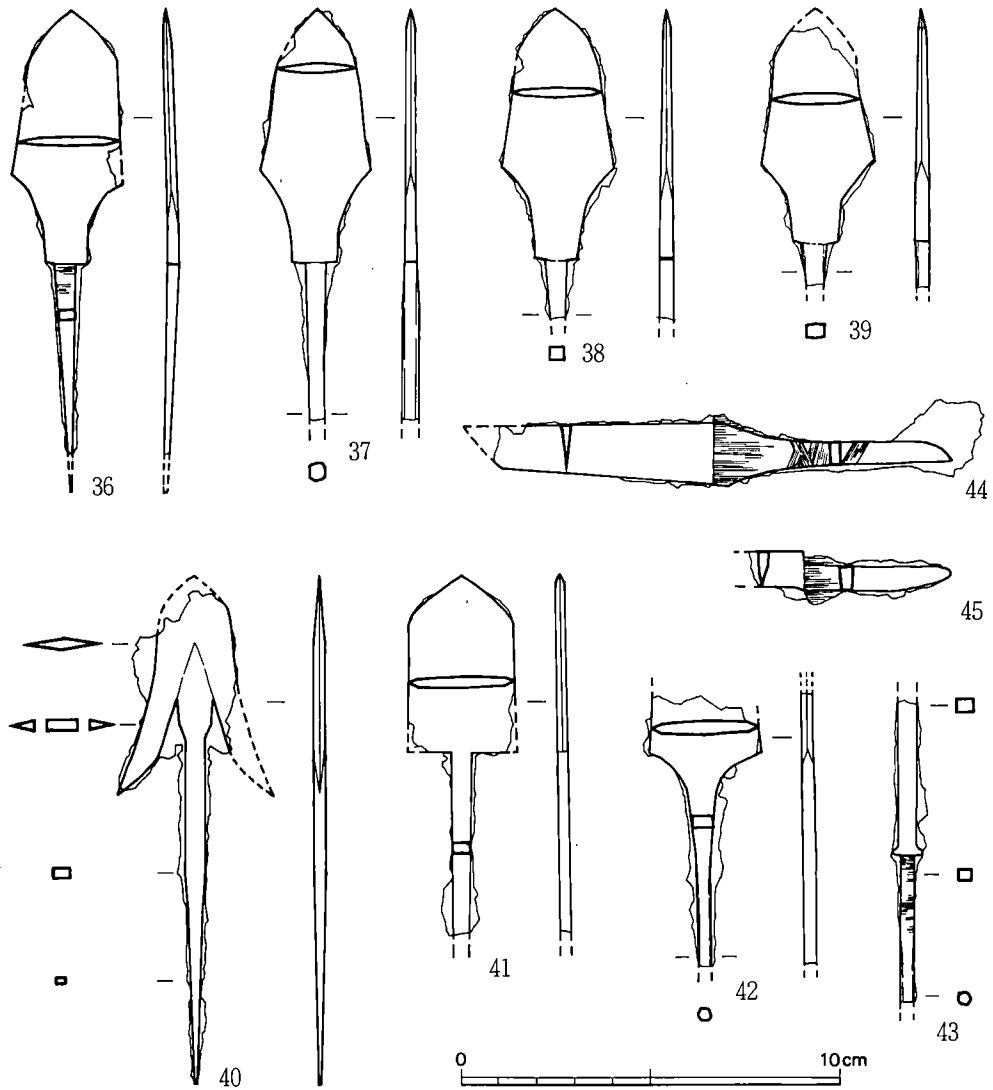
第3図に出土状態を示すように、鉄刀46は床石に背を接して鋒先を左側壁に向け、奥壁寄りでの原位置のまま検出された。

また、鉄鏃36～38も床石に接して、左側壁寄りですべても鋒先部を奥壁に向けて検出され、

盗掘による攪乱はないものと考えられる。

しかし、鉄鏃40は盗掘で床石を除去した際の攪乱土中から・同43と刀子44も羨道部の攪乱土中から出土し、出土状態を図示していない刀子45は玄室左側壁の前壁寄り床攪乱土中から・鉄鏃39も墓道先端部上層から出土し、原位置からの検出ではない。

なお、鉄鏃42は既述の長頸壺30に、また、同41は杯蓋15にそれぞれ近接して検出され、既述した隙形土器22などと共に、墓道肩部の平坦面上に供献されたものと考えられる。



第8図 1号墳出土鉄鏃・刀子実測図(1/2)

鉄鏃 (36~43)

36~39は、平造の変形広根定角式で、いずれも鋒先~篋被部の計測値や形状がほとんど一致する。

36は、茎の先端部を欠失するが、全長約12.6cmを測り、身の長さ4.6cm・最大幅3.0cm、鋒先~篋被の長さ6.7cm、篋被幅1.2cmを測る。

37は、鋒先端部を欠失するが、身の長さ約4.3cm・最大幅3.0cm、鋒先~篋被の長さ約6.7cm、篋被幅1.2cmを測る。

38は、身の長さ4.2cm・最大幅3.0cm、鋒先~篋被の長さ6.6cm、篋被幅1.2cmを測る。

39は、鋒先を欠失するが、身の長さ約4.1cm・最大幅3.0cm、鋒先~篋被の長さ約6.2cm、篋被幅1.2を測り、上記3例よりわずかに小形である。

40は、平造の広鋒腸扶式で、鋒先部を欠失するが、全長約13.3cm・身の長さ5.8cmに復原され、最大幅4.2cmを測る。

逆刺から鋒先部近くまでは切刃を呈し、腸扶部は身の $\frac{1}{2}$ 強におよぶ。

なお、篋被部の長さはわずか1.1cmしかなく、篋被を逆刺内に深く造る。

41は、平造で身は五角形を呈し、身の長さ4.6cm・最大幅2.9cmを測る。

42は、平造で身の大半を欠失し、43は棘篋被遺存部片である。

刀子 (44・45)

44は、鋒先を欠失し遺存長12.0cmを測るが、約12.8cmに復原でき、刃部の最大幅1.6cmで、背の厚さは断面部から茎の中ほどまで変化なく0.3cmを測る。

45は、刃部の使用・研ぎによる刃部幅の減少が著しい。

鉄刀 (46)

全長88.1cm・刀身長75.9cmを測り、身には鞘の一部が錆着し、関部には鏝が装着された状態で検出された。

身は、背・刃部共に内弯するが、刃部の内弯はわずか2mmで、断面部での計測値は、鋒近くで刃幅28mm・背厚6mm、前半部で同31mm・8mm、後半部で同33mm・8.5mm、関部で同32mm・8mmで、中央部がわずかに刃幅・背厚共に大きい。

関は、背に段の無い刃部みの斜角片関である。

茎は、背で茎尻から6.2cm、刃部側で茎尻から5.9cmと9.7cmでそれぞれ内弯し、茎全体では刃部側で3mm内弯し、断面部での計測値は、関部で幅23.5mm・背厚8mm・刃部側厚7mm、中央部で同17mm・6mm・5mmで、斜角に落とした茎尻の方に幅・背厚・刃部側厚共に小さくなる。

目釘孔は、関側が径3.0×3.5mmを測る隅丸長方形、茎尻側が径4.0×4.0mmを測る隅丸方形を呈す。

なお、図示するように、身鞘口部には鞘口金具の装着面内部の鞘木質部が錆着し、その金具残片も木質部に錆着したまま遺存しており、鞘口金具の断面形状は卵形で、後述する柄口金具の外径から、概略長径46mm・短径29mmに復原され、厚さ1.5mm・長さ23mmを測ることができる。

鐔は、平面形状はやや卵形で、外径が長径84mm・短径68.5mm、内径が34.5mm・短径18.5mmを測り、断面図に示すように外縁厚5mm・内縁厚2.5mmを測る。

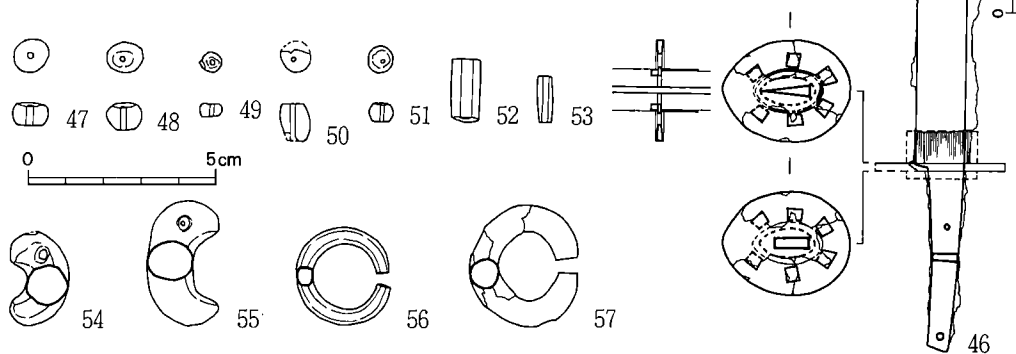
鐔の透しは、内縁近くにわずかに台形の6孔を穿ち、1孔の平均計測値は、外縁9.5mm・内縁7.5mm・両側縁7.5mmで、鐔内・外径形状に合わせて外縁長を2mmだけ長くしている。

なお、図示するように、柄口金具は錆失して遺存しなかったが、鐔の柄口面の内縁に沿って、柄口金具の装着痕が観察され、概略の外径は長径44mm・短径28mmを測るが、金具装着内部の柄木質部が先述の鞘口金具例のように錆着して遺存しないことから、金具の断面形状は円形ではなく方形に近い、環状の柄口金具が装着されていたものと思われる。

装身具 (図版20, 第9図)

第3図に出土状態を示すように、奥壁寄りの東側壁側で勾玉54と小玉48・51が、玄門寄りの西側壁側で勾玉55と管玉52が、羨道部の攪乱土中から耳環57がそれぞれ出土した。

以上の装身具のなかで、勾玉54と小玉48・51は床石上や床石の間隙で出土したが、既述のように、鋒先が西側壁側を向く鉄刀46の原位置での検出状態などから、原位置そのままでの検出ではないが、奥壁に沿うように安置された被葬者の頭仕方向が東側壁側であったことを示すものと考えてよいだろう。



第9図 1号墳出土鉄刀(1/5)・装身具(1/2)実測図

また、勾玉55と管玉52は、周辺部の床石が盗掘により除去されてはいるが同様に鋒先が奥壁側を向く鉄鏃36～38の検出状態と同一の型式・法量などの特徴などから、原位置そのままでの検出ではないが、西側壁に沿うように安置された被葬者の頭位方向が玄門側であったことを示すものか。

耳環 (56・57)

56は、中実の銅地金貼り製で、外径 24.45×26.20 mm・断面部径 4.35×4.90 mmを測る。

なお、中実の銅地の断面形状は八角形を呈し、丁寧に展延されている。

57は、中実の銅地銀貼り製で、外径 28.30×31.70 mm・断面部径 7.45×7.80 mmを測る。

勾玉 (54・55)

54は、外径約 24.5×15.5 mm・断面部径 10.25×11.0 mm・孔径 1.9×2.5 mmを測る質の悪い硬玉製で、色調は白味淡緑色を呈し、穿孔は片面のみから施す。

55は、外径 19×33 mm・断面部 9.90×12.5 mm・孔径 1.3 mmを測る瑪瑙製で、色調は白味淡茶色を呈し、穿孔は片面のみから施す。

管玉 (52・53)

52は、全長が 17 mmで、外径は図上の上部が 7.50 mm・中位の最大径が 7.65 mm・下部が 7.60 mmを測り、わずかにエンタシス状をなし、内径は向上端が 3.35 mm・下端が 3.15 mmを測るガラス製で、色調は淡緑色を呈す。

53は、全長が 12.5 mmで、外径は図上の上部が 3.80 mm・中位の最大径が 4.05 mm・同下部が 3.85 mmを測り、わずかにエンタシス状をなし、内径は両端共に 1.55 mmを測る粘板岩製で、色調は白味淡緑灰色を呈し、穿孔は両面から施す。

小玉 (47～51)

47～49はガラス製で、色調は47・48が濃青色、49が明青色を呈す。

47は、上・下面共に丁寧に研磨するが、厚さは 5.30×6.045 mmと不揃いで、外径も $8.65 \sim 9.50$ mmと長円形を呈し、孔径 $1.25 \sim 1.17$ mmを測り、引き延し時の孔と平行な気泡は48よりも少ない。

49は、厚さ $3.40 \sim 3.95$ mmを測り、外径は $5.45 \sim 6.0$ mmであるが巻き付け端部が突出し、孔径 1.5 mmを測る。

50・51は瑪瑙製で、色調は50が表面は風化して淡茶褐色・内部は濃茶色を呈し、51は明茶褐色を呈す。

50は、厚さ 10.5 mm・外径 7.65 mm・孔径約 1.5 mmを測る。

51は、厚さ $4.70 \sim 5.90$ mm・外径 $6.80 \sim 7.45$ mm・孔径約 1 mmを測り、上・下面や外面の研磨が雑で、特に外面は多面形のままである。

第3節 2号墳の調査

1. 墳丘と主体部

墳丘は、1号墳以上の地山面に及ぶ造成時の削平により消滅し、規模は不明である。

また、調査区内で墓道の一部を検出した際に、地元の方に墳丘の大略の位置を教えて頂き、バイパス路線外の調査区北方の蜜柑園の地表に数多くのボーリングを試みたが、石材に当らずボーリング棒には地山の粘質土のみが付着し、羨道～玄室部の掘り方埋土の確認もできなかった。

なお、主体部の主軸は、後述するように墓道北半部の方向が $S-41^{\circ}-W$ を測ることから、1号墳の墓道～羨道～玄室の主軸が一致する例であるならば、同様にほぼ $S-41^{\circ}-W$ としてよいだろう。

2. 土層観察

調査区内で検出した墓道内の埋土の厚さは、調査区北壁で30cm前後で、上層は暗褐色粘質土、下層は地山の赤褐色粘質土ブロックや炭粒を含む茶褐色粘質土であった。

なお、上記の下層は、調査区北壁近くだけで検出され、上層のみが墓道検出南端部まで続いて検出された。

3. 墓道

墓道は、調査区の北壁外へも続くが、その北壁から南端の遺存部までの長さは、墓道の東壁で約7.8mを検出し、上面幅はの間あまり変化なく、約0.9mを測る。

墓道の方向は、南半部で $S-54^{\circ}-W$ を測るが、北半部では1号墳から離れるように若干屈折し、 $S-41^{\circ}-W$ を測る。

なお、上記のように北半部が若干屈折しても、2号墳の墳裾は1号墳北方では1号墳の墳裾と近接し、周溝も一部共有したことも考えられる。

4. 出土遺物

須恵器 (第10図)

杯蓋 (58)

小破片で口径は不明であるが、約13cm 前後と思われる。

器内・外共にヨコナデを施した体部は直線的に高く外傾し、器内の口唇部内面にわずかな沈部を認める。

杯身 (59)

口径12.1cm・受け部外径13.6cm を測り、器周残 $\frac{1}{8}$ 弱の破片である。

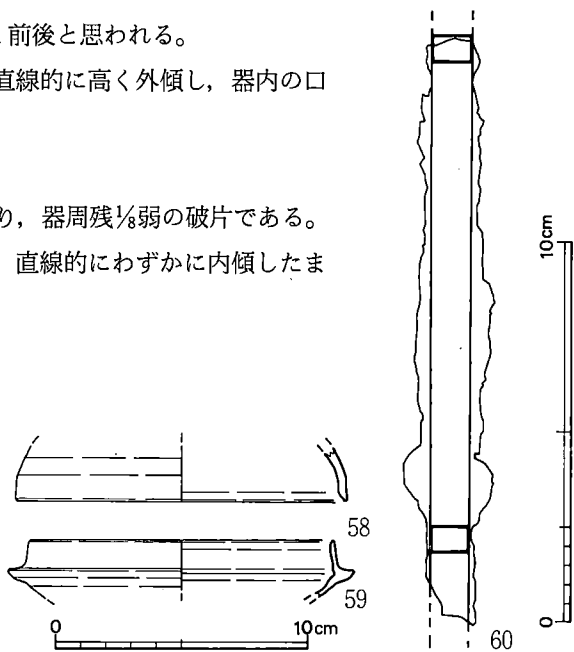
器外は、受け部から屈曲した口縁部が、直線的にわずかに内傾したまま立ち上がる。

鉄製品 (図版20, 第10図)

不明鉄器 (60)

第10図に示すように、図上の下端共に欠失し、現存長15.2cm を測る。

また、断面形状は長方形を呈し、上端が $5 \times 10.5\text{cm}$ ・下端が $5 \times 10\text{mm}$ を測り、わずかに上端が大きい直線棒状のもので、鑿あるいは鑿かとも思われる。



第10図 2号墳出土須恵器 (1/3)・鉄製品 (1/2) 実測図

第3章 おわりに

第1節 山田沖古墳群について

第1章の第1節で既述したように、『山田沖古墳群』は、数基からなる「飛熊古墳群」の所在する丘陵から分岐した西側丘陵に、検出した1・2号墳、同様に分岐した東側丘陵に3・4号墳が現存する。

西側丘陵では、検出した1・2号墳以外にも、北側の調査区外に蜜柑園造成で削平された古墳が立地したとしたら数基であったと考えられ、西側丘陵に所在した古墳を西支群とすれば、西支群は尾根線上に5基前後からなるものと思われる。

また、東側丘陵では、当初の調査日誌抄で既述したように、調査地点の標高32.5mを頂部とする中央区南部から東区北部にかけては古墳は所在しないことを確認し、中央区北部は造成前の地形が急傾斜をなしていたために、3m以上もの地下げしての蜜柑園造成をしており、古墳が立地しなかった可能性が強い。
(註6)

そして、東側丘陵の北半部で3・4号墳が尾根線上に離れて立地することから、西側丘陵に所在した古墳を東支群とすれば、東支群も尾根線上に数基からなるものと考えられる。

以上のことは第2節で後述するように、1号墳築造に際しては、周溝を設ければ計画主軸方向に、周溝外縁～墓道直線部間 $0.31\text{m} \times (20+35) = 17.05\text{m}$ 、同計画直交軸0方向に、周溝外線径 $0.31\text{m} \times (20 \times 2) = 12.4\text{m}$ 規模の地山空間が確保されているが、前述の標高32.5mを頂部とする中央区南部から東区北部にかけてはこれだけの地山空間の確保のための地山整形作業量は、1～4号墳が立地する尾根線部の作業量に比較すれば莫大なもので、換言すれば立地に適さないことから言えるであろう。

このように、東・西両支群からなる『山田沖古墳群』は、同様に南方へ続く丘陵の尾根部に数基が立地する「飛熊古墳群」の東・西支群として検討すべきであろうが、当1・2号墳だけの調査例だけであるので、「楠木古墳群」なるものの再確認を含めて、周辺の古墳群の分布調査の成果に待ちたい。

第2節 山田沖1・2号墳について

1. 1号墳の仕上り規模と計画規模（第11図，表1・2）

掘り方は，主体部に一致した計画主軸・計画規模で整然と丁寧に設けられたが，玄室の西側壁腰石と北壁（奥壁）腰石の配置に際し，掘り方の西・北壁の一部が西側壁腰石の外側石面形や北壁腰石の東・西側壁腰石間への納まりの関係で一部拡幅されており，計画主軸はS-66°-Wであったことなどを既述した。

また，主体部は，当初の計画主軸・計画規模で整然と配そうと試みたが，ほぼ当初の計画主軸・計画位置に配すことができたのは最初の東側壁腰石と東・西玄門両腰石など数石で，使用した各部の腰石の大きさと石面の形状から，その他の腰石配置は若干変更され，仕上り（実測）主軸はS-63°-Wに変化したことなどを既述した。

以下では，以上のことなどを踏まえて，前章で既述した掘り方・主体部の仕上り（実測）規模と当初の計画規模について，若干の指摘をしたい。

第11図は，1号墳の造営に際し，計画規模の主体部（本報告では，石材構築による玄室部～玄門部～羨道部～羨道貼石部）を計画主軸のもとに築造するためには，掘り方もまた，主体部と計画主軸を共有し，当初から計画規模のものを設けることの好例として示したものである。

加えて，各所の腰石配置の順序と，その腰石材の大きさと石面・稜および主体部の構築技術から規制されつつその規制のなかで努力し得られた主体部・掘り方両者の仕上り規模・主軸と，上記の主体部・掘り方両者の計画主軸・規模との関係を考える際の好例として示したものである。

したがって，計画主軸による計画規模の掘り方・主体部・墳丘の古墳造営にあっては，計画主軸に直交する玄室部での直交主軸も必要であり，第11図では，**○**を付した横破線軸でこの直交主軸**○**（以下，直交軸**○**と略）を示す。

また，第3図での仕上り主軸とその直交東西軸を交点**0**として，加えて示す。

なお，第11図の方眼1コマは0.31mで示したもので，その理由は下記およびその他の計測値から得たものである。

直交軸**○**下での掘り方東・西側壁下端間の計測値は，東側壁部がわずかに東方に広がる（このことも直交軸**○**の使用を示唆する）ので，図に破線で示すような下端を描けば4.04m，同軸**○**下での東・西側壁石間の計測値は，1.84mで，第2章第2節2の①～⑨で既述したように，計画規模を示す。

また，同節の玄門部の規模の項で既述したように，東玄門腰石の北・西石面の屈折稜と西玄

門腰石の北・東面の屈折稜（▶印）間の計測値は0.93mで、同①～④で既述したように計画規模を示し、同節玄門プランの項で既述した玄門長の計測値0.765mも計画規模を示す。

上記の4計測値のなかで、 $0.93\text{m} \times \frac{1}{3} = 0.31\text{m}$ を得るとき、 $4.04\text{m} \div 0.31\text{m} \approx 13.03$ 、 $1.84\text{m} \div 0.31\text{m} \approx 5.94$ 、 $0.765\text{m} \div 0.31\text{m} \approx 2.47$ で、ほぼ各 $13 \cdot 6 \cdot 2.5$ 倍となる。

このことに加えて、福岡県築上郡椎田町所在の16基からなる石堂中後ヶ谷古墳群の本年度報告のなかで、筆者が分担執筆した2・3・13号墳で得た0.32mの計画時の基準値から、上記^(註7)0.31mを前後する計画時の基準値を使用したものとして、方眼1コマを0.31mで図示した。

以上のようにして、第11図を検討し、得た結果の一部をまとめたものが表1・2である。

表中では、両軸からの方眼数を、計画軸から東に6.5であるものを単に6.5東、直交軸Oから南に2.5であるものを単に2.5南などと略記している。

掘り方規模

①拡幅前の北壁遺存部である北壁下段部壁の傾斜角 82° は、東壁傾斜角 86° よりも 4° 緩慢である。

上記のことから、蜜柑園造成による削平前の墳丘基底部面での方形部掘り方上端（墳丘基底部内縁）規模は、東・西壁が計画主軸7.5東・西、南・北壁が直交軸O7.5南・北で、中心Oから両軸下で7.5規模とし、全体の上端規模は、7.5規模 $\times 2 = 15.0$ 規模の正方形計画規模であったと考えられる。

②墳丘基底部外縁の規模は、周溝を設けたとすれば周溝内縁、周溝を設けない部では盛土裾と掘り方の水平床面南端部の規模で、中心Oから両軸下で、上記の①の7.5規模 $\times 2 = 15.0$ 規模とし、全体の外縁径（墳丘外径）規模は、15.0規模 $\times 2 = 30.0$ 規模の円形計画規模（墳丘が遺存しないので、隅丸方形計画規模の可能性も一部にはあるが）であったと考えられる。

③周溝を設けたとすれば、周溝外縁の規模は、周溝の規模（幅）が2.5規模（後述） $\times 2 = 5.0$ 規模で、中心Oから両軸下で、上述①の7.5規模 $\times 2 + 2.5$ 規模（後述） $\times 2 = 20.0$ 規模とし、全体の周溝外縁径は、 $20.0 \times 2 = 40.0$ 規模の計画規模であったと考えられる。

④墓道のなかで、主軸下に設ける直線墓道部の規模は、中心Oから主軸下で、上記①の7.5規模 $\times 4$ に同③の周溝部の2.5規模（後述） $\times 2 = 5.0$ 規模を加えた35.0規模、このことはまた、上記②の15.0規模 $\times 2$ に同③の周溝部の5.0規模を加えた35.0規模の計画規模であったと考えられる。

以上①～④のことから、中心Oから主軸下北20.0（周溝を設けなければ同15.0）・同下南35.0で、計55.0（同50.0）の南～北規模が、また、中心Oから直交軸O下東20.0（同15.0）・同下西20.0（同15.0）で、計40.0（同30.0）の東～西規模が、中心O・主軸・直交軸Oの1号墳築造の3要素を使用して、実際に縄打ちされて求められたものとする。

そして、上記の縄打ちと各部規模を示す杭打ちの第1工程後に、第2工程としての地山整形、

表1 1号墳掘り方規模一覧表

軸	操作部位	内 訳	
計 画 直 交 軸 O か ら	方形部の北壁下端	7.0北 (2.5×2+2.0)	} [直交軸北部長] 7.0 方形部長14.0 [直交軸南部長] 7.0
	方形部の南壁下端	7.0南	
	方形部内の羨道底部床	~10.0南	
	墓道東肩の祭祀部	10.0~15.0南 (2.5×4~2.5×6)	[祭祀部長] 5.0
	水平床面部の北端	7.0北	} 水平床面長 23.0
	水平床面部の南端	16.0南 (2.5×6+1.0)	
	同上の意図	15.0南 (2.5×6)	[中心O] ……[周溝内縁] 15.0 [墳丘底部外縁]
	墓道東肩南端の平坦部	19.5~21.5南	
	同上の意図	20.0南 (2.5×8)	[中心O] ……[周溝外縁] 20.0
	同上の意図~墓道南端	20.0~33.0	[周溝外墓道の直線部長] 15.0
計 画 主 軸 か ら	方形部の東壁下端	6.5東 (2.5×2+1.5)	} [主軸東部幅] 6.5 方形部幅13.0 [主軸西部幅] 6.5
	方形部の西壁下端	6.5西	
	方形部内の羨道部東壁下端	1.5東	} [方形部羨道幅] 2.5
	方形部内の羨道部西壁下端	1.0西	
	方形部外の羨道部東壁下端	1.0東	} [方形部外羨道幅] 2.0
	方形部外の羨道部西壁下端	1.0西	
	墓道東肩の祭祀部	2.5~3.5東	[東祭祀部幅] 1.0
	同上の意図	2.5東	[初被葬者頭位] = [東祭祀部中心] 2.5
	墓道西肩の祭祀部?	2.5~3.5西	[西祭祀部幅] 1.0
	同上の意図?	2.5西	[1次被葬者頭位] = [西祭祀部中心] 2.5 [追被葬者用]
墓道部の東壁下端	0.5東	} [墓道部幅] 2.0	
墓道部の西壁下端	1.5西		

地山整形後に最終調整し決定した上記規模の再度の縄打ちと各部規模を示す杭打ちの第3工程、掘り方掘削の第4工程に至ったものとする。

なお、①で既述した方形部は、上端を1辺7.5規模で掘り始め、壁の傾斜角に緩慢差を当初から設けることにより、下端規模は東・西壁が直交軸O下6.5東・6.5西、南・北壁が計画主軸下7.0北・7.0南で、全体の下端規模としては、東・西壁間6.5規模×2=13.0規模、南・北壁間7.0規模×2=14.0規模を得たものとする。

表2 1号墳主体部規模一覧表

軸	操作部位	内 訳	
計画 直交軸 ○から	北壁東部石の東端南石面	5.5北 (2.5×2+1.5)	〔直交軸北部長〕 5.5 〔直交軸南部長〕 2.5
	南壁東・西石の石面屈折稜※	2.5南	
	玄門框石の南石面	4.5南 (2.5×2-0.5)	〔玄門部長〕 2.5 〔羨道壁長〕 2.5 〔羨道貼石長〕 2.5
	玄門東・西石の南側石面稜	5.0南 (2.5×2)	
	羨道西壁石の南端石面稜	7.5南 (2.5×3)	
	羨道西壁貼石部の南端石面	10.5南 (2.5×4+0.5)	
	同上の意図	10.0南 (2.5×4)	
計画 主軸 から	玄室東壁石の石面	2.5東	〔主軸東部幅〕 2.5 〔玄室部幅〕 6.0 〔主軸西部幅〕 3.5
	玄室西壁北部石の石面	3.5西 (2.5×1+1.0)	
	玄門～羨道部間東壁の石面	1.5東	〔玄門部～羨道部幅〕 2.5
	玄門～羨道部間西壁の石面	1.0西	
		計2.5	

※ ▶印の玄門東・西袖石の石面稜を結ぶ線

上述以外の各部の計画規模の特徴は、表1に示したとおりであり、説明を省く。

主体部規模

①玄室の東・西側の壁腰石の規模は、東側壁腰石（以下、腰石を略）が計画主軸2.5東で、墓道東肩の祭祀平担部中心の同2.5東と一致し、後述する玄室南側の規模2.5南その他の部位の2.5規模と一致することから、計画主軸2.5東規模と考える。

また、西側の規模は、掘り方西壁の中央部を拡幅してまで、西側壁の北部腰石を配していることから、主軸3.5西規模で、西壁側に当初から1次追被葬者の配葬を計画したもの考える。

②玄室の南・北側壁腰石の規模は、北側壁材2個のなかで、1個をもっと小ぶりの石材と組み合わせることで、掘り方北壁を拡幅することなしに、例えば2.5規模×2=5.0規模とすることもできるのにしていないことから、北壁側に当初から初被葬者の配葬を計画しての、2.5規模×2+0.5=5.5の直交軸○5.5北規模であったと考える。

また、南側壁腰石の規模は、玄門部の東・西両石の第11図▶印の稜の位置を、西側壁の南部腰石を移動・再配置してまで、直交軸02.5南に揃えていることなどから、直交軸○南2.5規模と考える。

上述以外の各部の計画規模の特徴は、表2に示したとおりであり、説明を省く。

最後に、表1・2の内訳にも示すように、主体部の各部だけでなく、掘り方の各部についても、0.31mの規準値（1規模）の使用と共に、2.5規模(0.31m×2.5=0.775m)と7.5規模(2.5規模×3=2.325m)の使用(2.5規模の一種の小棹,2.5規模等間で印された7.5規模の一種の大間棹の使用)も、1号墳の特徴として指摘できるものと考えたい。

2. 出土遺物

1号墳の出土遺物のなかで、須恵器の杯身・蓋の特徴について既述したことをまとめると、以下のとおりである。

- a類（古いⅢA式の特徴を残すもの）……杯蓋1・6
- b類（a類からb類への過渡的なもの）……杯蓋2～4・11・12 杯身5・7～10・17・18
- c類（新しいⅢB式の特徴を示すもの）……杯蓋13・15・16 杯身14

また、出土部位（位置と層位）が明かな土器について既述したことをまとめると、以下のとおりである。

- 部位イ 墓道東肩の平坦部周辺（㊸層群）……

杯蓋 a類 6	杯身 b類 7
小形長頸壺20	長頸壺30 罎形土器22
- 部位ロ 部位イの下層（㊸層群）…… 杯身 c類16の破片
- 部位ハ 部位ロの南部（㊸層群）……

杯蓋 c類15・16	杯身 b類17
土師器高杯35	
- 部位ニ 墓道東肩南端の平坦部周辺……

杯蓋 b類 4・5
土師器高杯34

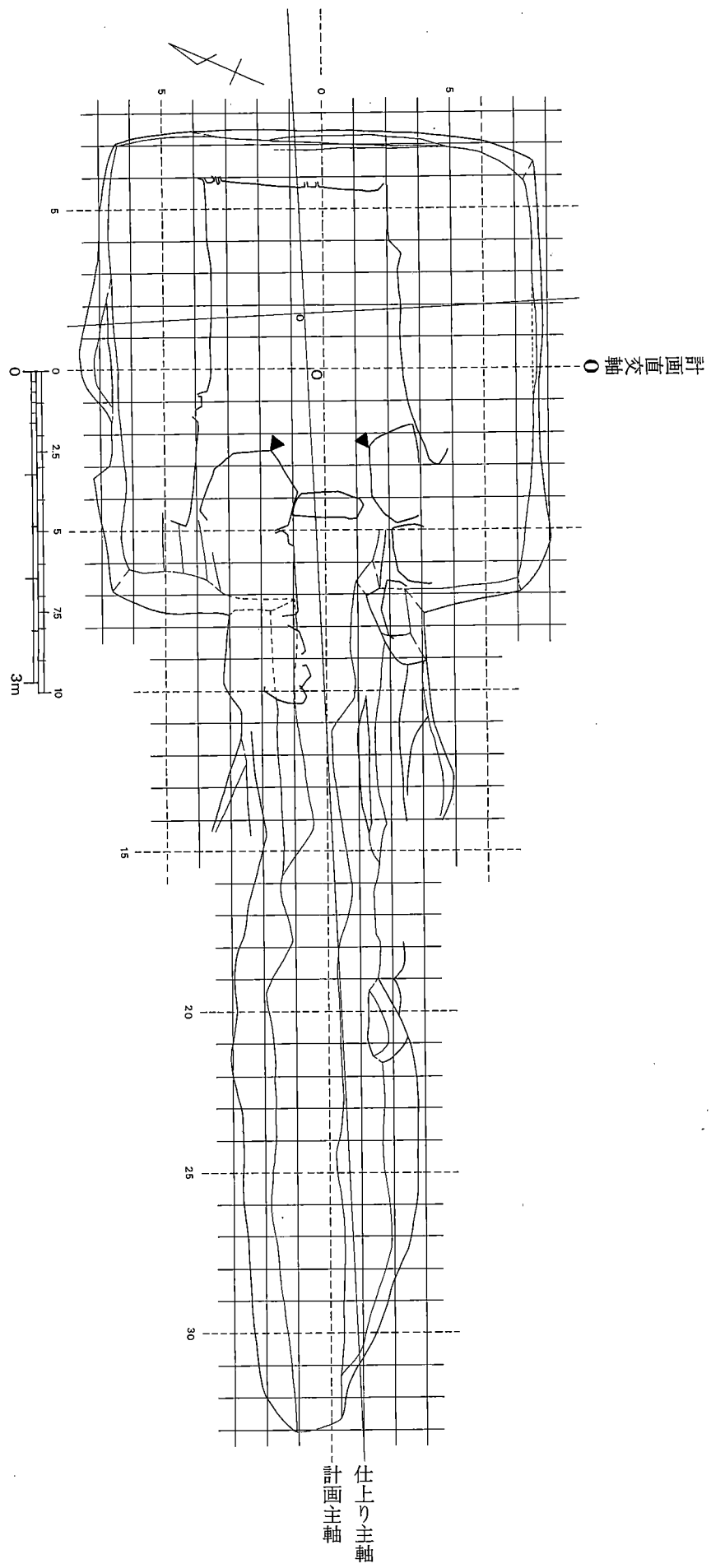
ところで、部位イについては、前節で既述したように、計画主軸2.5～3.5東・直交軸O 10.0～15.0南に当初から平坦に掘られた墓道東側の墓前祭祀部位であり、部位の中心は計画主軸2.5東で、北壁（奥壁）寄りに玄室東壁（計画主軸2.5東）頭位とする初被葬者のためのものであると考えられる。

また、部位イ出土の土器5例については、前章第2節4で既述したように、小形長頸壺20・長頸壺30・罎形土器22が、祭祀用土器として当初から意識して製作され、また、入手・使用者もそのことを当初から意識して入手し、意識して祭祀用に使用し、意識して墓前祭祀部に配置されたものであり、杯蓋a類6・杯身b類7も入手・使用者との関係が強いものと考えられる。

このことから、入手～墓前祭祀前の使用者と古墳築造（依頼）者と初被葬者の三者は同者で、墓前祭祀の使用者は、初被葬者と一部併行して生存し、初被葬者との関係が強い者と考えてよいだろう。

同様に、部位ハについては、計画主軸2.5～3.5西・直交軸O 10.0～15.0南に当初から平坦に掘られた墓道西側の墓前祭祀部位であり、部位の中心は計画主軸2.5西であり、玄室西壁（計画主軸3.5東）寄りに玄室南壁頭位とする1次追被葬者のためのものである。

また、部位ハ出土の土器4例については、前述5例がa類を含み、c類を含まないのに対し、a類を含まず、c類を含むことから、そして、杯蓋c類16に接合する破片が部位ロ（㊸層群）



第11図 1号墳計画規模方眼図 (1/60)

から出土したことなどから、この4例は前述5例の東肩祭祀部群とは別群で、むしろ、この4例の入手～墓前祭祀前の使用者と1次追被葬者の三者は同者で、墓前祭祀の使用者は、この1次追被葬者と一部併行して生存し、1次被葬者（初被葬者も含む）との関係が強い者と考えてよいだろう。

部位ニについては、同様に計画主軸1.0～2.0東・直交軸O 20.0南に当初から掘られた平坦部で、部位の中心は計画直交軸O 20.0南で、同溝外縁南端部にあたり、墳丘外域墓前祭祀部位と考えられる。

また、部位ニ出土の土器3例については、前述5例がa類・後述4例がc類を含み、a・c類を含まないb類だけであることから、この3例は、後述4例とは別群で、前述5例とは同群（あるいは前述5例～後述4例間の群）ではあるが、この3例に対する意識は前述5例とは別で、前述5例の墓前祭祀者が使用していたものを、初被葬者に対して墓前祭祀したと考えてよいだろう。

以上のことから、玄室からの須恵器の出土はないが、1号墳築造～初葬の時期を、ⅢA式に認められる古い特徴も一部に残す杯身a類6が、ⅢB式への過渡的な杯蓋b類7と同期に一部使用された、ⅢB期の6世紀後半でも古い段階と考える。

また、1次追葬の時期を、ⅢB式への過渡的な杯蓋4・5や杯身b類17が、ⅢB式に認められる新しい特徴を示す杯蓋c類15・16と同期に使用された、ⅢB期の6世紀後半でも新しい段階と考える。

註

- 註1 『福岡県遺跡等分布地図（中間市・遠賀郡編）』（福岡県教育委員会，1977）
- 註2 字楠木の標高58mの山頂部周辺は雑木林のままであるが，山麓部は沖古墳群の所在する丘陵同様に蜜柑園に造成されており，山頂部周辺での古墳の所在や，山麓部での造成時に破壊された古墳の存在が充分予期される。
- なお，上記のことについては，調査中に地元の方々にも御質問したが，当山田沖1号墳の所在を含めて，明確な御教示は得られなかった。
- 註3 橋口達也編「野間窯跡群」（『岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集，福岡県教育委員会，1988）
- 註4 川述昭人編「東田古墳群」（『岡垣町文化財調査報告書』第2集，岡垣町教育委員会，1977）
- 註5 橋口達也「似非土師須恵器」（『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集I，1989）
- 註6 註2と同じ
- 註7 緒方泉編「石堂中後ヶ谷古墳群」（『一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集，福岡県教育委員会，1990）



圖 版



1. 山田沖古墳群北区（表土除去前）〔南東から〕



2. 同（表土除去後）〔南東から〕



1. 山田沖古墳群中央区西側の伐開作業〔南東から〕



2. 同 西側の表土除去作業〔南東から〕



1. 山田沖古墳群中央区西側の無縁墓群（表土除去前）〔北から〕



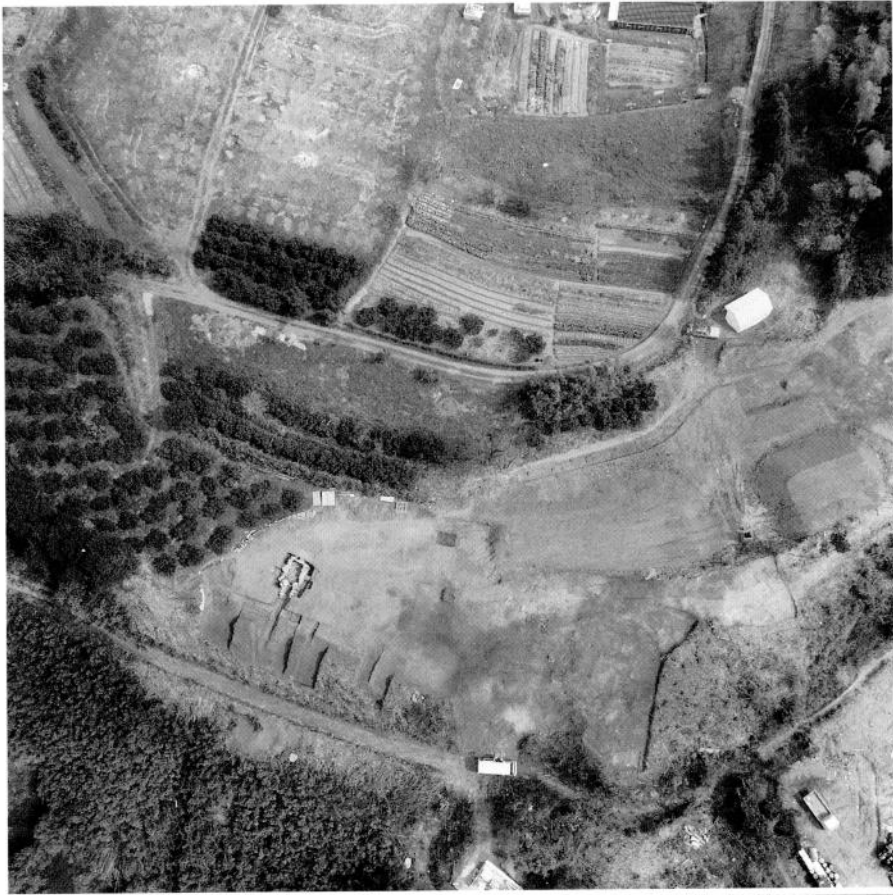
2. 同（表土除去後）〔北から〕



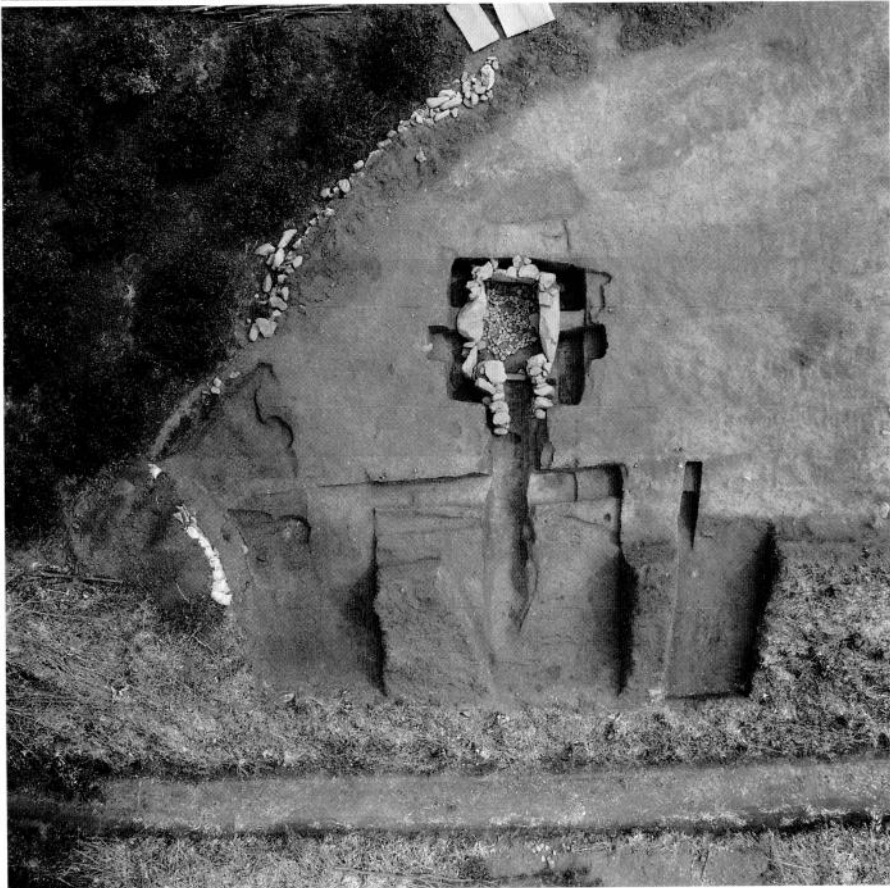
1. 山田沖古墳群中央区東側の表土除去作業〔北から〕



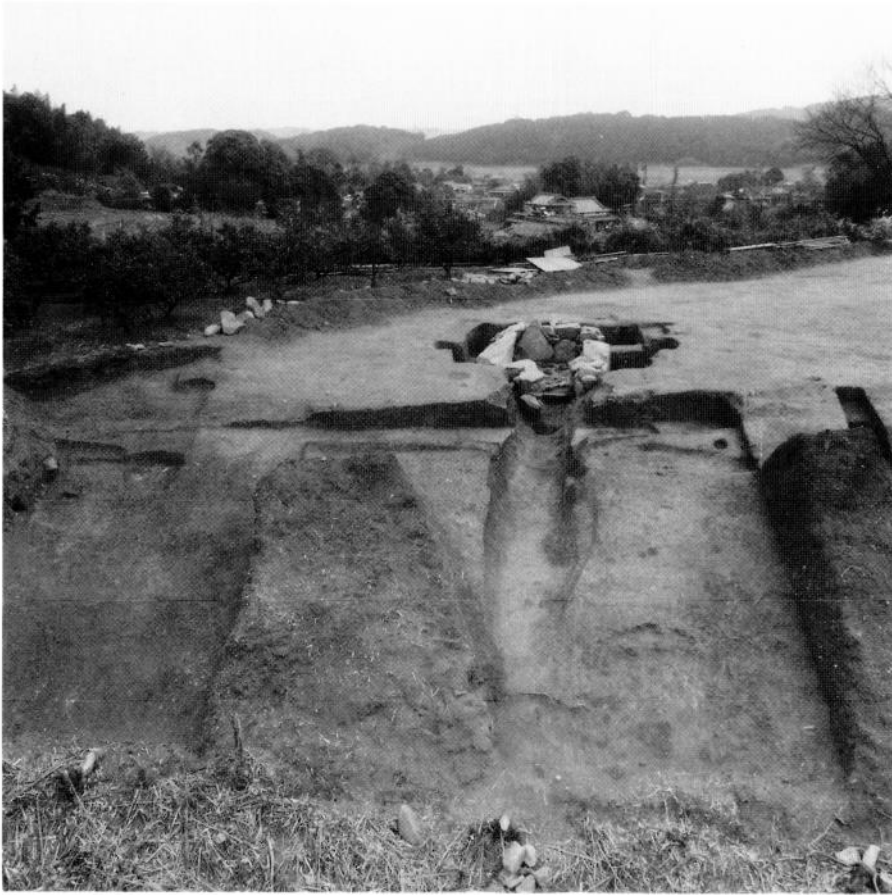
2. 同 中央区（表土除去後）〔北から〕



1. 山田沖古墳群北・中央区全景(西上空から)



2. 山田沖古墳群1・2号墳全景(西上空から)



1.
1・2号墳〔西低空から〕



2. 1号墳全景〔東から〕



1. 山田沖古墳群の周辺地形（南上空から）



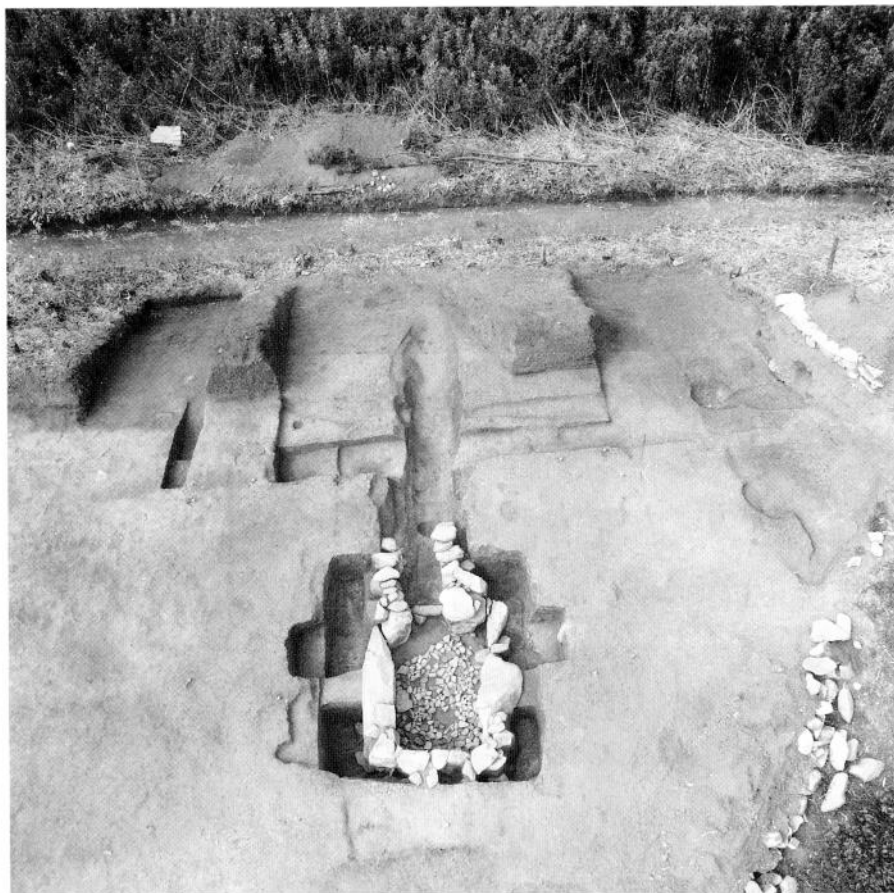
2. 1・2号墳（南中空から）



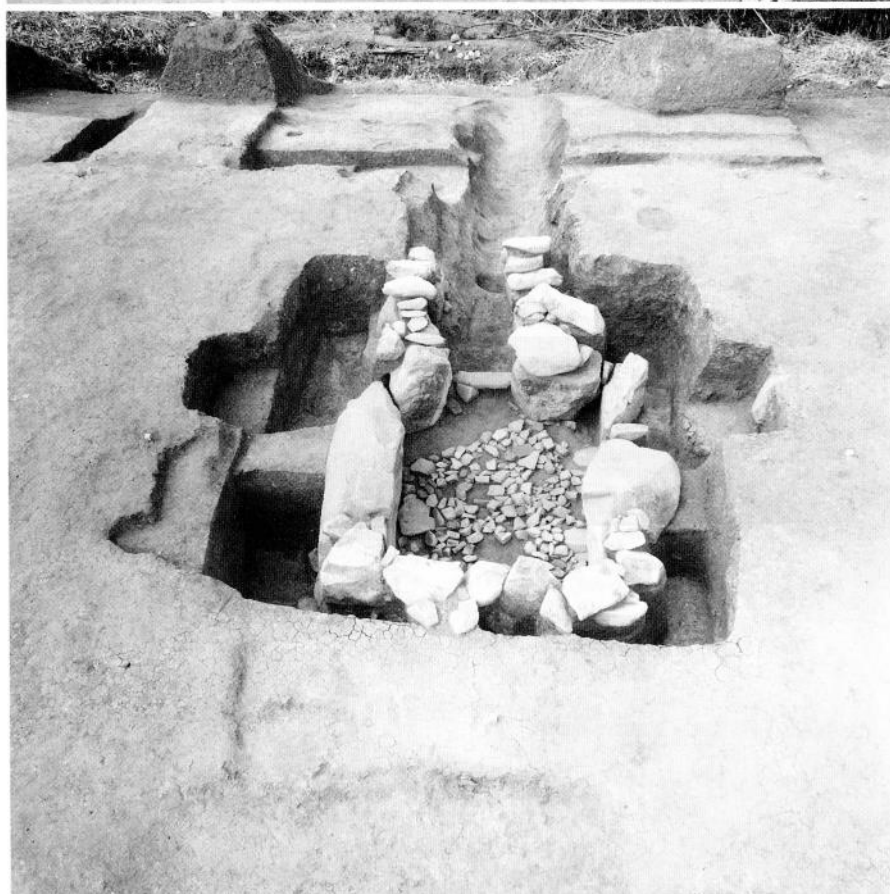
1. 山田沖古墳群の周辺地形〔北上空から〕



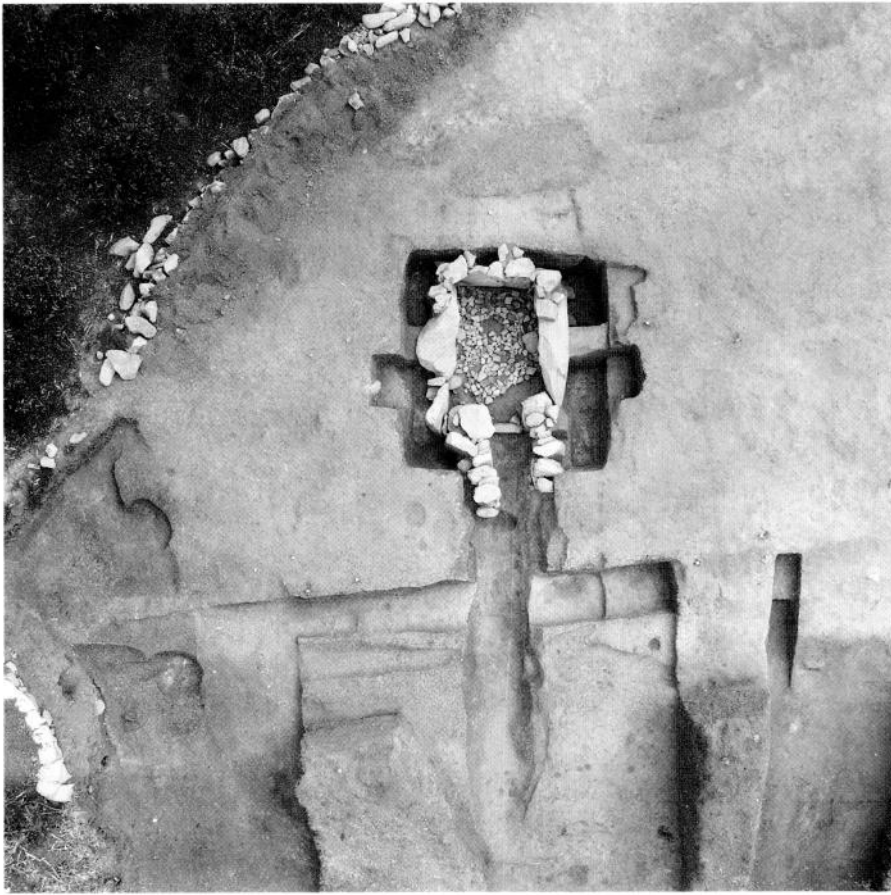
2. 1号墳〔北中空から〕



1.
1・2号墳全景（東上空から）



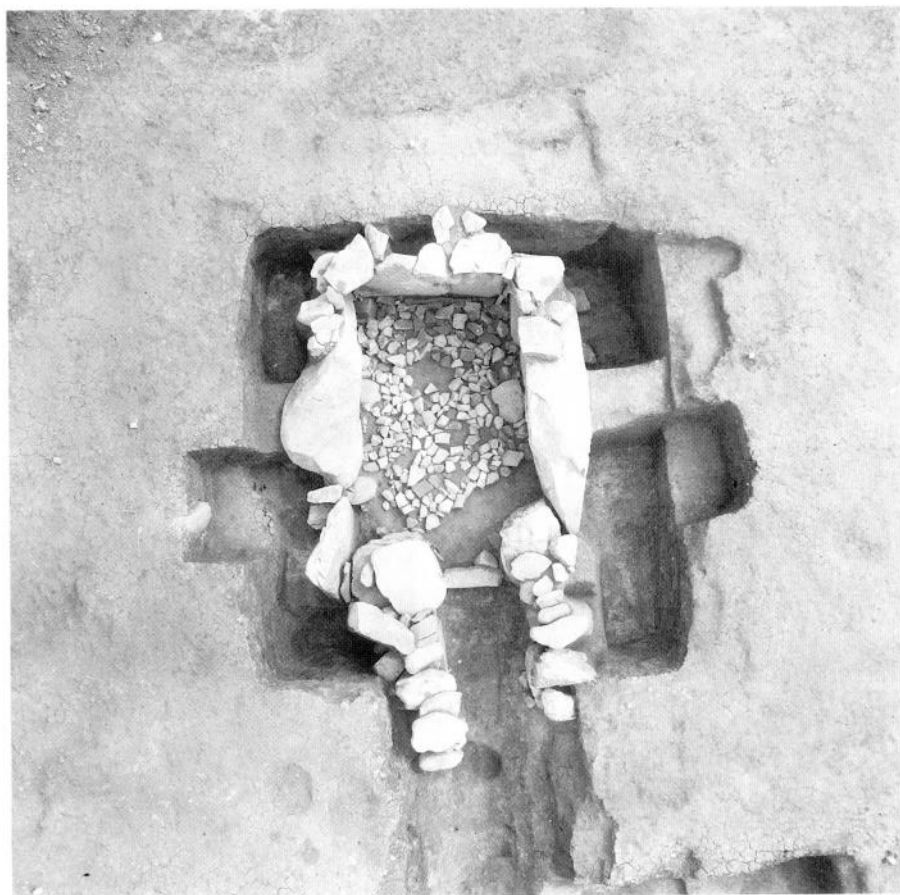
2.
1号墳全景（北中空から）



1. 1・2号墳全景〔西上空から〕



2. 1号墳全景〔東から〕



1.
1号墳〔西中空から〕



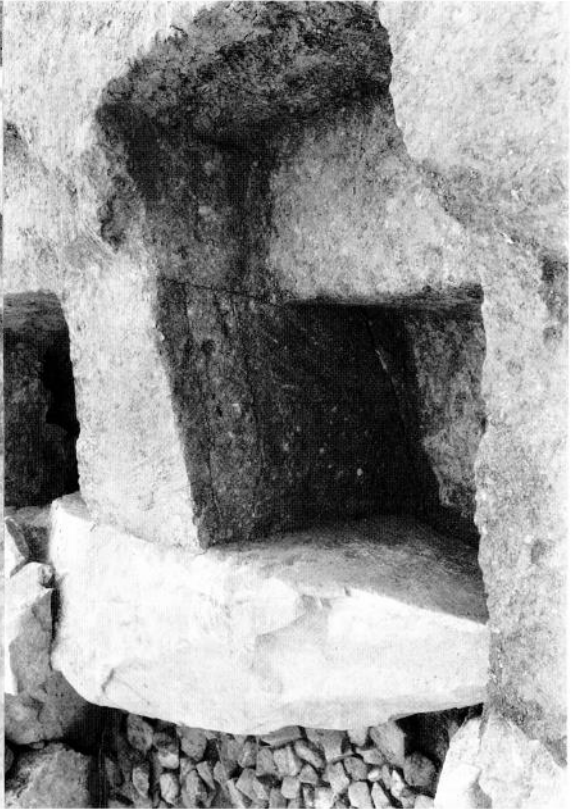
2. 同 奥壁と遺物出土状態〔西から〕



3. 同 石室の掘り方〔西から〕



1. 1号墳石室の北壁部掘り方土層〔西から〕



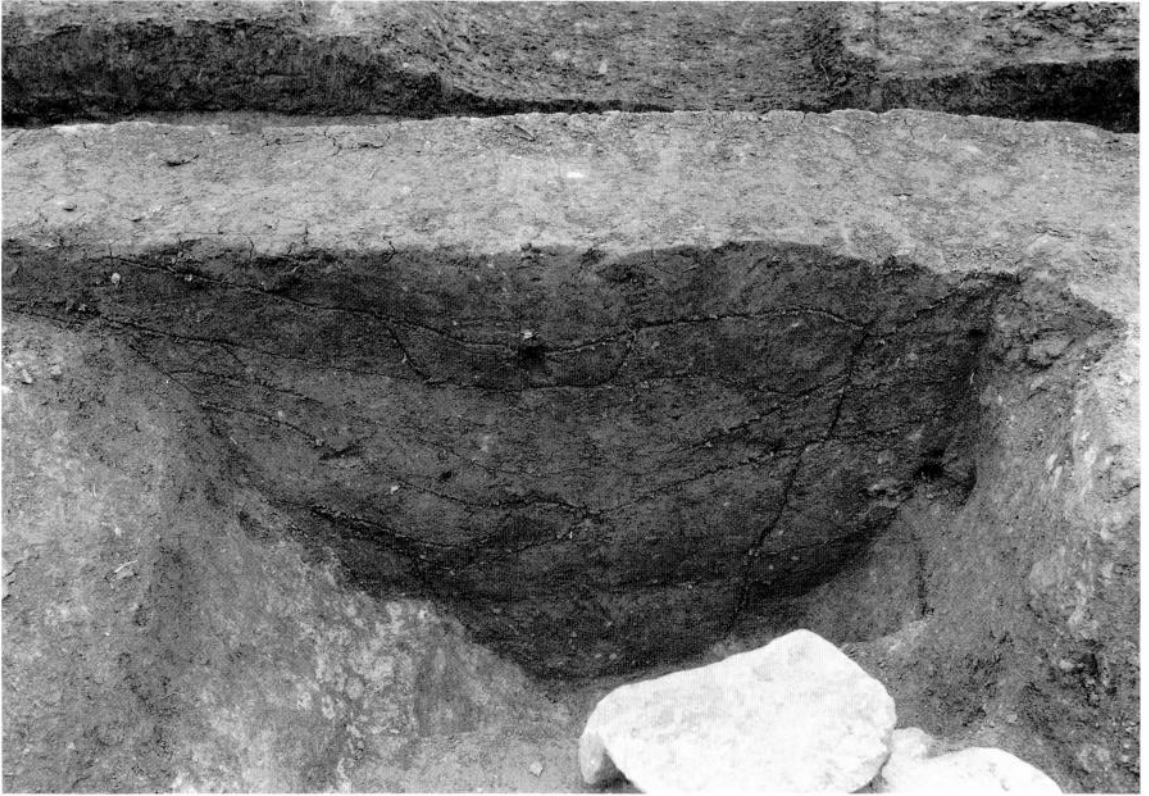
2. 同 南壁部掘り方土層〔西から〕



1. 1号墳玄門と遺物出土状態〔東から〕



2. 同 羨道と遺物出土状態〔西から〕



1. 1号墳墓道の土層〔東から〕



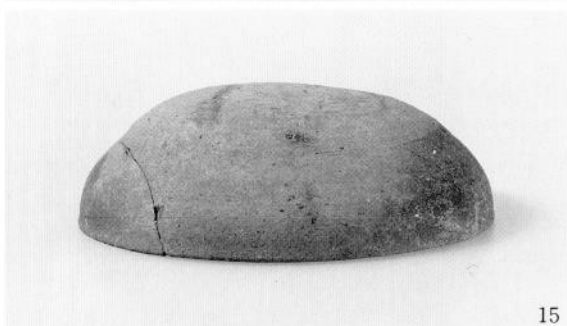
2. 同 墓道の遺物出土状態〔北から〕



1. 1号墳墓道の土層〔西から〕



2. 同 墓道の遺物出土状態〔南から〕



1号墳出土須恵器①



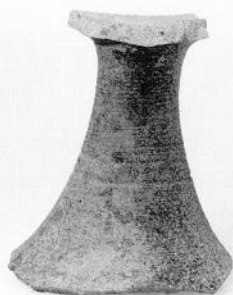
19



24



20



25



22



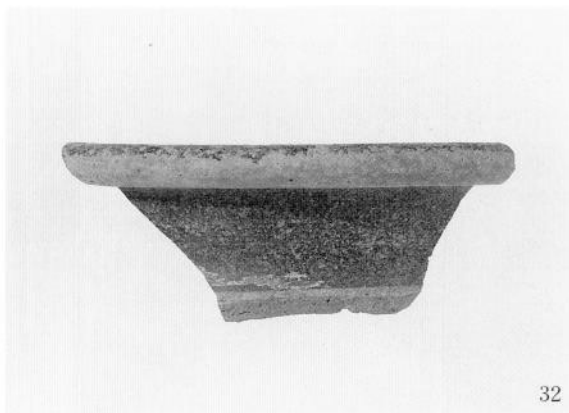
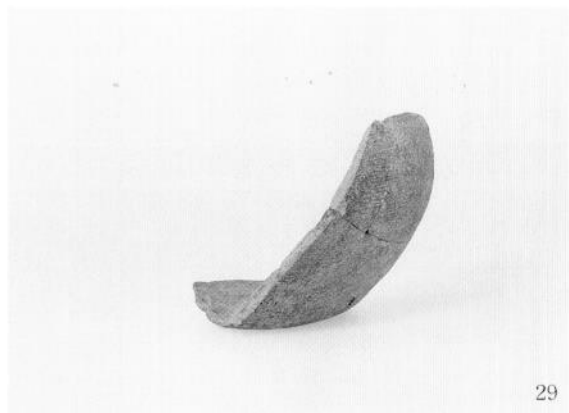
26



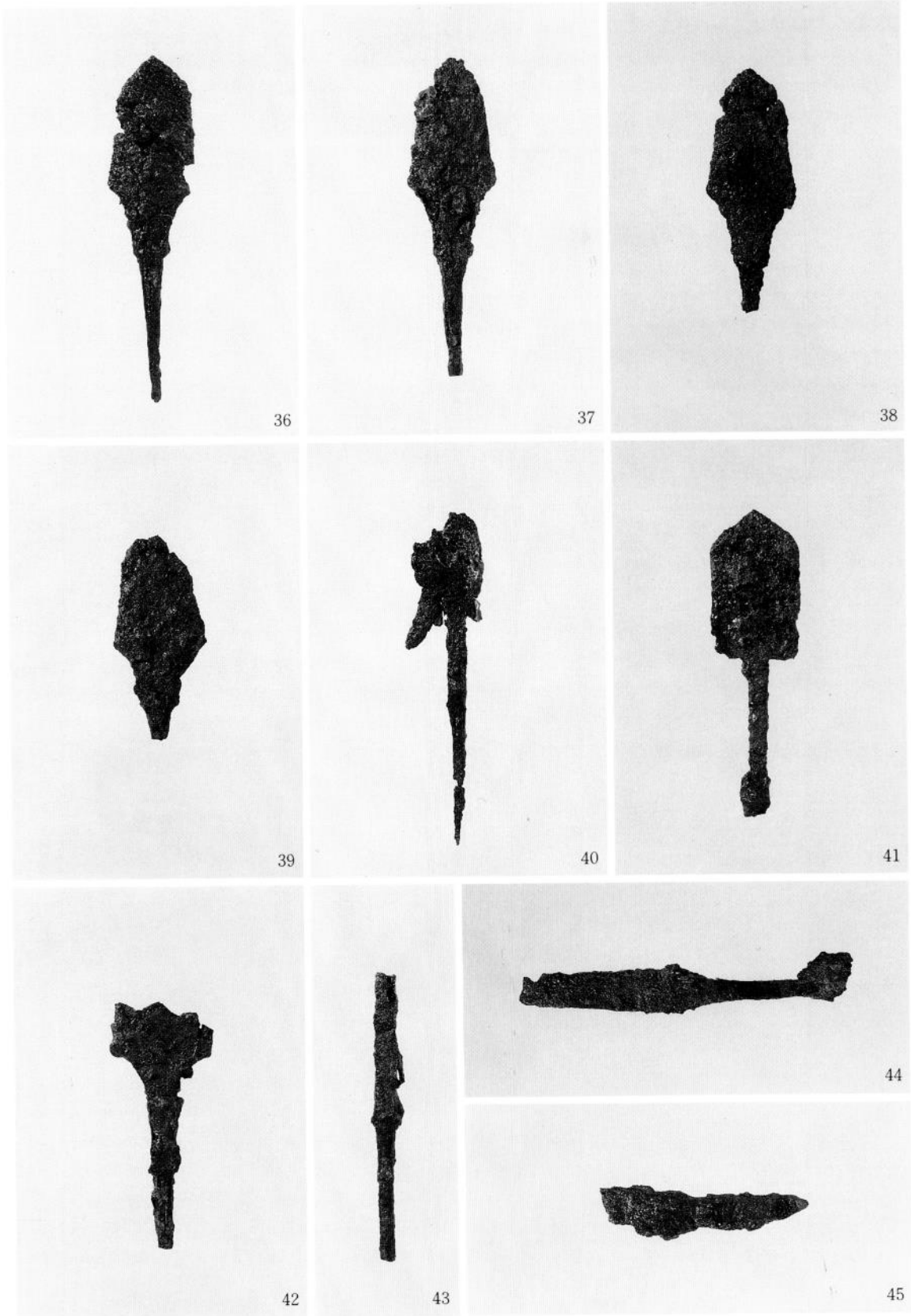
23



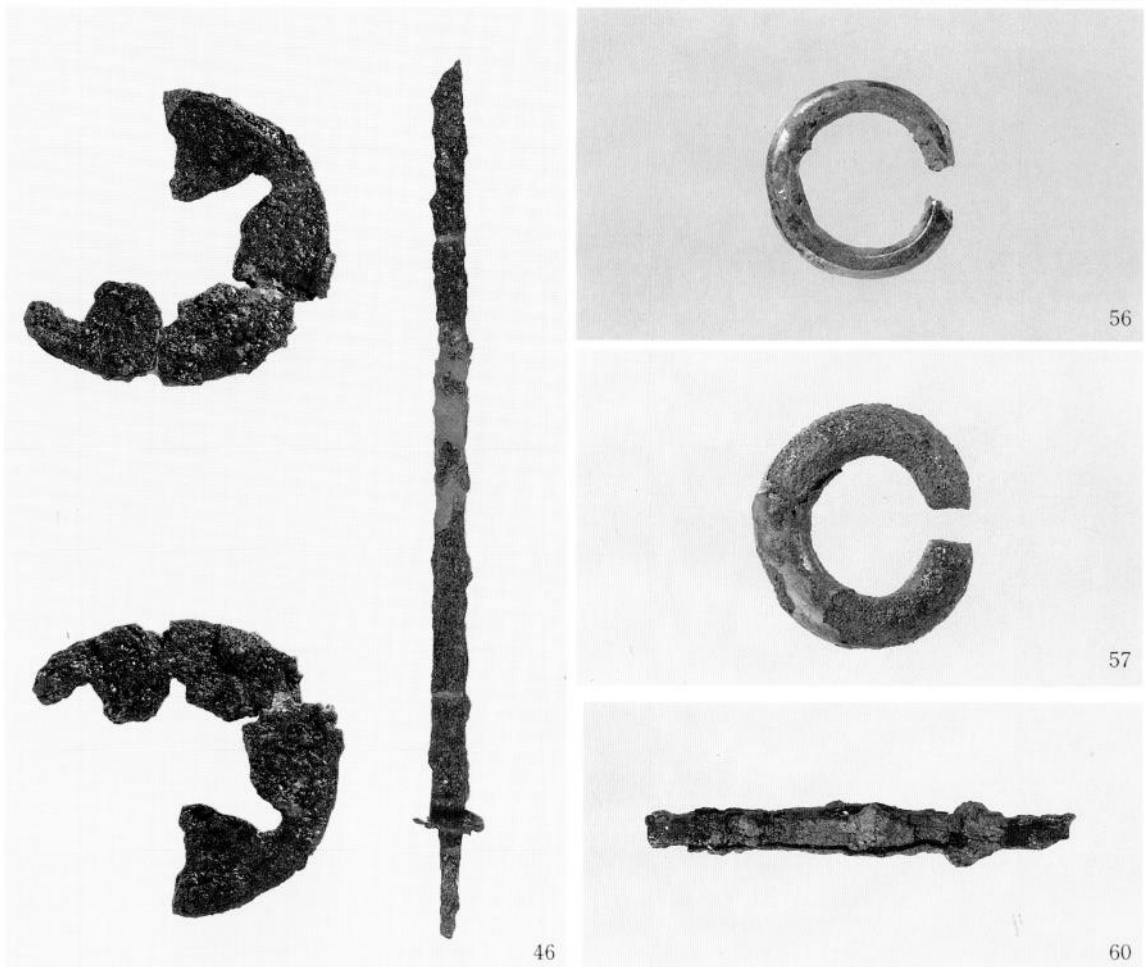
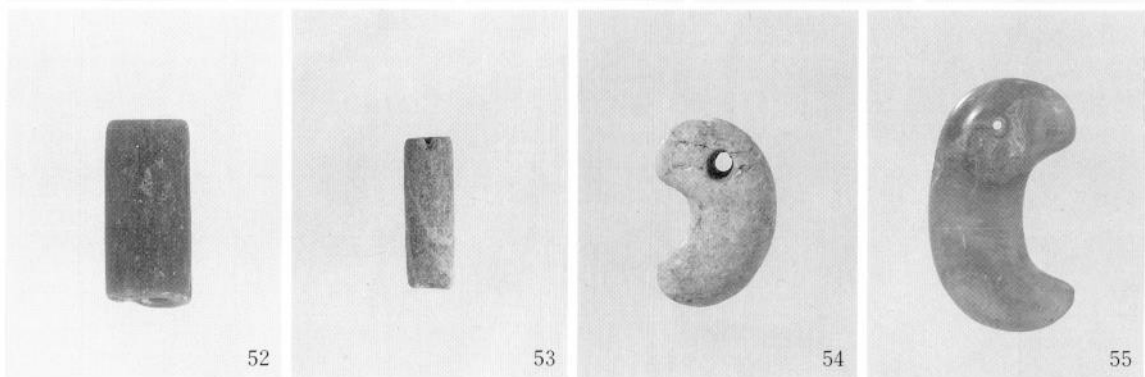
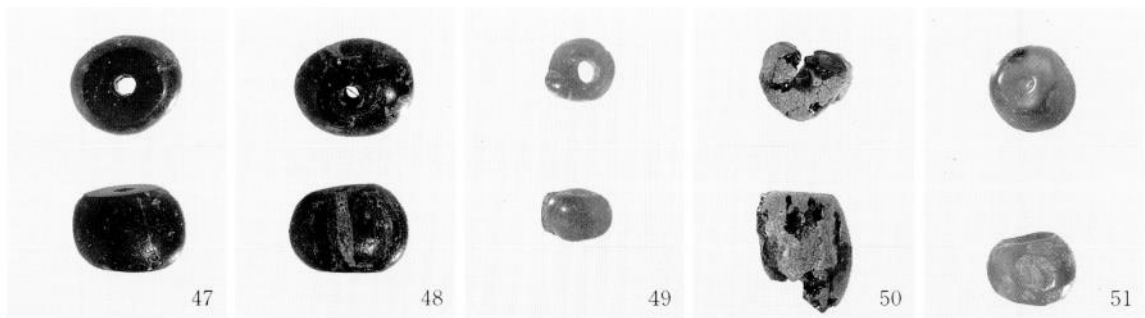
28



1号墳出土須恵器③・土師器



1号墳出土鉄鏃・刀子



1号墳出土鉄刀・玉・耳環

2号墳出土鉄器

岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集

山田沖古墳群

1990年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番41号

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 元	登録番号 9